

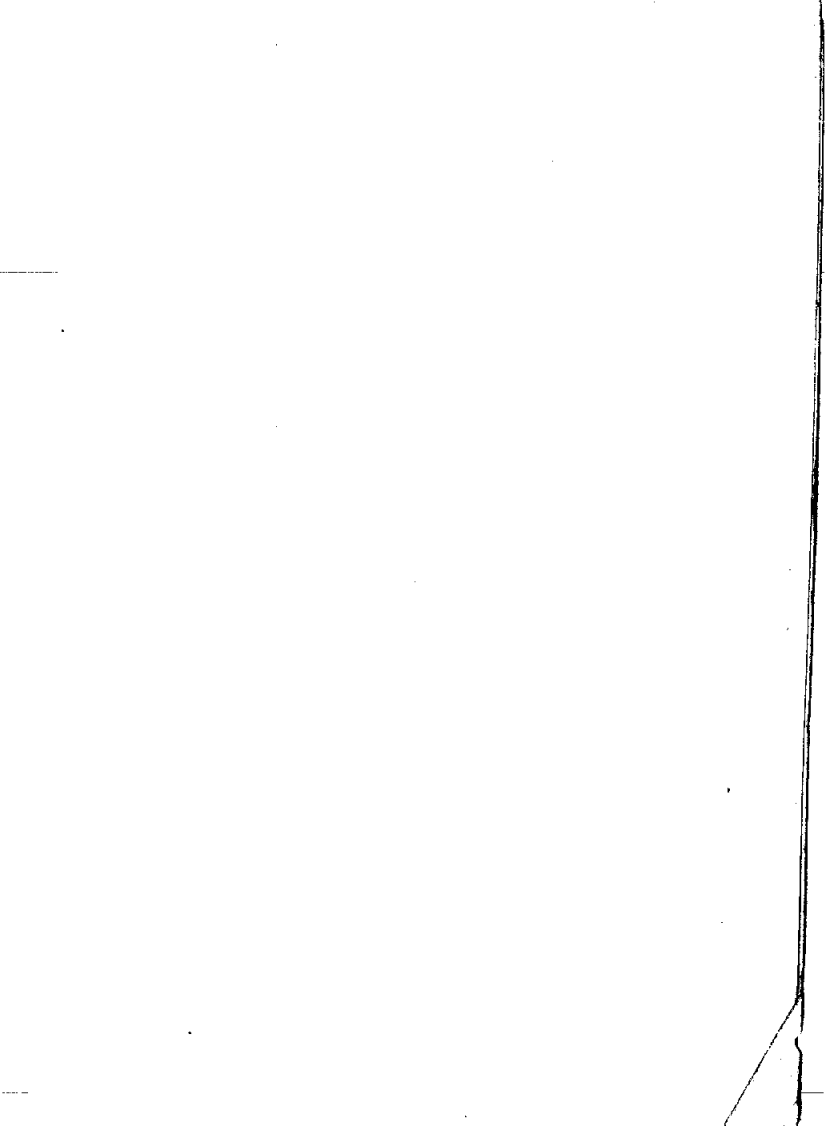
岩波文庫

665

蘭學事始

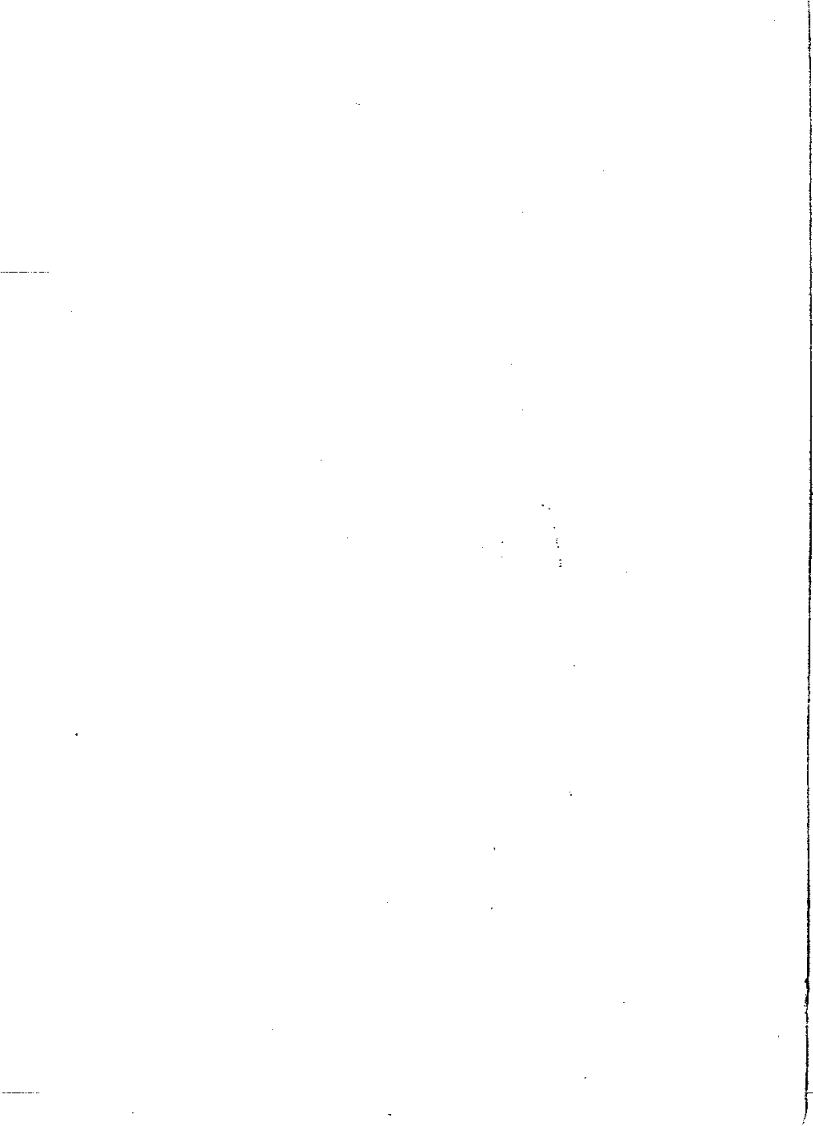
杉田玄白著

岩波書店





(彫木) 生先白玄田杉



解説

「蘭學事始」二卷は、わが國最初の洋學者の一人なる杉田玄白先生が、その死歿の三年前、文化十二年（西曆一八一五年）、八十三の高齡を以つて自ら筆を呵し、ひそかに「世に在るの絶筆なり」と意識しつつ、子孫後世の爲に書き遺した回想録である。

書かれてあることは、それより半世紀ほど以前の明和八年（一七七一年）から足かけ四年間、當時まだ壯年であつた筆者を中心として、その他中川淳庵、桂川甫周、石川玄常、鳥山松圓等の同志が、先輩前野良澤先生指導の下に、かの醫學界に於ける劃期的功績ともいふべき「解體新書」の翻譯に従事して、殆んど言語に絶するの苦心を経験した、そのいきさつを主として述べ、並びにその前後に於ける蘭學興隆の機運を語つたものである。けれども、その頃は蘭學といへば所謂人身窮理の學か、然らざれば

物産藥品の學と同義語の如く理解されてゐたやうな世間の風潮であつたし、また此の「蘭學事始」も、一面から見れば、從來長い間漢法にのみ據つてゐたわが國の醫術が如何にして西洋科學の基礎の上に建てられるやうになつたかを語るものである故に、ややもすれば、それは今日に至るまで尙ほ、單なる醫學史上の一述作として受け取られるやうな傾がある。併し「蘭學事始」は決してさういふ點に於いてのみ我我に訴へるものではない。日本の近代社會には早くから西洋的なるものに對するあこがれがきざして居り、十分にそれを迎へ入れるだけの準備が出来てゐたところへ、たまたま醫學藥學の方面に於いて先づ必要が最初の現はれを生ぜしめ、つづいて他の多くの部門の科學的研究法を導き入れることになり、遂に一世紀あまりの年月の間に、すべての物の見方、考へ方を根柢から變へてしまつたほどの驚くべき革新を成し遂げた。その大勢的變化の濫觴の記録である所に「蘭學事始」の價値は懸かつて居るのである。福澤諭吉先生が、明治二十三年此の書の再刊に際して「單に醫學上の一小紀事とする勿

れ」と叫んだのは尤もなことであつた。

たしかにそれは日本の近代文化についての一つの *Genese* である。少くとも之は學的方面に於いて十分に言ひ得ることである。そのことを尙ほ明瞭に理解するため、當時に於ける洋學興隆の状態について、此處に一瞥を下すことにしよう。

日本の文化の成長を助けた二つの大きな外國の影響——千三百年前に始まつて數世紀間つづいてゐた支那文化の影響と、及び、三百年前から今日までまだつづいてゐる西洋文化の影響と——此の二つの内で、今直接に我我に交渉するものは勿論後者である。併し西洋文化の移入は古代に於ける支那文化のその如く圓滑には始まらなかつた。天文十年（一五四一年）に機會が一隻のポルトガル商船を大友宗麟の領地なる豊後の海岸に運び來つて以來、西洋と日本とのつながりは生じ、三年後には鐵砲が傳來し、九年後には天主教の宣教師が渡來し、交易と布教と相並んで榮え、豊後（府内）、白杵、津久見）、肥前（平戸、横瀬浦、口の津、島原）、筑前（博多）、薩摩（鹿兒島）

等には洗禮を受けた者が非常に多く、國主中にも大友、大村、有馬の如き所謂切支丹大名が出来て、天主教の勢力は九州のみならず、更に山口、堺、京都にまで及び、政治上侮るべからざる状態に立ち到つたと見たので、天正十七年（一五八九年）豊臣秀吉は之を禁じ、ただ黒船の交易のみを許した。次に徳川の天下となり、初めは外人に寛大であつたため、ポルトガル（長崎）、エスパニヤ（浦賀）、オランダ、イギリス（平戸）等、競つて互市を開き、同時に切支丹信仰もまた盛んになつて來たので、慶長から、元和、寛永へかけて禁教また禁教、或ひは追放、或ひは處刑、遂に鎖國令は完全に布かれ、僅かに平戸の蘭人と長崎の葡人のみが通商を許されることになり、續いて蘭葡競争の結果、後者は敗れて長崎を見棄て、寛永十八年（一六四一年）其處へ蘭人の商館が平戸から移されて、それ以來長崎出島のみがわが國の西洋と交渉する唯一の關門とはなつたのである。

出島の阿蘭陀屋敷——それは珍奇と新鮮の有らゆる異邦的なるものの仲繼所であつ

た。其處には毎年本國から交替して来る甲必丹カピタン（一種の領事）が逗留してゐて、嚴重なる日本官憲の監視の下に交易が行はれた。彼の周圍には公認されたる數名の通詞がゐて、一般日本人と紅毛人との直接の對話を妨げた。いつしか通詞の家が唯一の西洋語の貯藏所となつた。甲必丹は毎年一回通詞を隨へて江戸なる將軍を訪問すべく旅行せねばならなかつた。江戸にも熱心なる西洋研究希望者はゐた。——新井白石はその最も著しい一人であつた。——けれども甲必丹の滞在は限られたる僅かの日數であつたので、その附添通詞について學習することは困難であつた。それ故に阿蘭陀語を學習するためには是非とも長崎へ行かねばならなかつた。——青木昆陽がその最も著しい先驅者であつた。

斯くの如くして通詞等は唯一の最大の蘭語學者であるべき筈であつたにも拘らず、實は彼等は——今日から見ると甚だ奇異なることに思はれるが——外國の言葉を話すことは許されてあつたけれども、外國の文字を讀むことは許されてなかつた。延享元

年（一七四四年）に青木昆陽が賜暇を得て長崎に遊學した時、通詞等の訴へる不平を聞いて幕府に取りなし、その翌年、西、吉雄、本木の三通詞だけが初めて阿蘭陀文書讀譯の特許を得た。併し、その他の者は依然として一切の外國文字から遮蔽されてゐた。此の不便は幕府が切支丹邪宗を極度に恐れた結果に外ならなかつた。更に、幕府の神經過敏は、一例を挙げれば、單に僅少の横文字を挿入したといふだけの理由を以つて、無害の隨筆「紅毛談」（おらんだばなし）（後藤梨春）にさへ絶版を命じたりした程であつた。

蘭 學 事 始

それほどやかましい禁制の中から蘭學が湧き起つたのはなぜかといふと、つまりは時勢がそれを要求したからであつた。幕府が初めそれを禁止したのは、それが幕府の施政に都合がわるいと思はれたからであつて、勿論要求がそれきり中絶したのではなかつた。要求は禁制の間も次第に成長し、元祿を過ぎて享保の頃には既に十分の機運を造つてゐた。將軍吉宗は或る意味に於いてその機運の助成者であつた。その機運の核心を成すものは未知のものを既知のものにしようとする熱情に外ならなかつた。そ

の熱情は主として應用科學の方面に向けられた。殊に醫學と藥學の研究が需用の代表者であつたことは前にも述べた如くである。當時、時代に先行して此の方面の開拓を志した具眼の士のことを俗に豪傑と呼んだ。(「蘭學階梯」)。元龜天正の昔には槍を持つた豪傑が天下を横行したが、享保以後の豪傑は長崎通詞の家から祕密に「ウァルデンブック」を手に入れて、それに依つて不思議なる未知の世界の征服を企てた。

我我は先づ前野蘭化の名を記憶せねばならぬ。彼は青木昆陽に二十五歳の弟で、杉田玄白に十歳の兄であつた。初めに甘藷先生に就いて蘭語の入門的知識を得、再度長崎に遊び、數卷の原書と首つ引で獨學して蘭文の基礎的構成を理解するに至つた。誠に千載の鴻業不朽の大功と云ふべしと「蘭學階梯」の著者は稱揚した。彼の蘭語が當時いかに貴重なものであつたか、また「解體新書」の譯出に取つていかに必要なものであつたかは、「蘭學事始」の記述に依つて容易に推知されるであらう。彼の周圍に集まつた所謂豪傑の士としては、杉田玄白、中川淳庵、桂川甫周、朽木龍橋、嶺春泰、

石川玄常、桐山正哲、鳥山松圓、大槻磐水、宇田川槐園、司馬江漢等があつた。「蘭學階梯」も皆篤學の人で、その研究は主として醫學、藥學ではあつたが、窮理、天文、その他の部門にもその歩を進め、或ひは輪講し、或ひは翻譯し、それより蘭學は天下に廣まり、欽嚮の諸才子、千里に笈を負ひて東都に集まるといふ狀況を呈した。日本最初の蘭學塾なる大槻磐水の芝蘭堂の設立されたのは寛政元年（一七八九年）で、その後同種のもが諸所に設けられ、蘭語に次いで、英、魯、佛、獨、等の諸國語も次第に學習され、延いては遂に今日の洋學研究の隆盛の端を開くに至つたのである。

その端緒の記念すべき記録なる「蘭學事始」は、初めに「蘭東事始」と題され、後の名に改められ、本文の末尾に書かれてある如く、筆者玄白翁より後進大槻磐水氏に贈られたものであつたが、その後久しく所在を失してゐたのを、慶應の末年に神田孝平氏（開成所頭取）が偶然にも湯島の露店で發見した。書かれて五十二年目であ

つた。當時すでに蘭學はすたれ、英、佛、獨の語學研究が専ら盛んになつてゐたのであるが、蘭か英かは問ふ所にあらず、すべての洋學の興隆記なる此の書のことであるから、同志の間に甚だ尊敬され珍重され、忽ちにして數部の複本が作られた。その愛藏者の中に福澤諭吉氏（慶應義塾長）があつた。先輩箕作秋坪氏（天文臺員）と共に繰り返し讀んでは感涙にむせんでゐたが、維新戰亂の際ではあつたし、何とかして此の貴重なる記録の世に失はれんことを防がんと思ひ、玄白先生四世の孫なる杉田廉卿氏と相談し、福澤先生の費用で、和装二卷の木版本を上梓した。明治二年己巳新刻、天眞樓藏版（天眞樓は杉田家の家號で、安永三年刊行の「解體新書」も天眞樓藏版）とあり、卷頭に石川大浪の筆に成る玄白先生の肖像が掲げられ、大槻磐水の書いた玄白先生略傳（杉田玄端識）と前記杉田廉卿の序文とが添へられてあつた。——今、「岩波文庫」本の底本として選んだのは即ち此の明治二年刊行の初版であるが、その後、明治二十三年四月、日本醫學會第一總會に於いて、學祖として前野蘭化（良澤）、杉田鷗

齋（玄白）、桂川月池（甫周）、大槻馨水（玄澤）、宇田川槐園（玄隨）、宇田川榛齋（玄眞）の六位の靈を祀り、その記念として「蘭學事始」を菊版洋装で再刊配布した。それには初版所載の内容の外に、福澤諭吉先生の序文と、前記六學祖を祀る文（日本醫學會會員の名にて）とが載せられ、巻末に長與專齋先生の演説の梗概なる「近世醫學沿革」なる一文が添へられた。これ等は、併し、醫學史上の文獻としては有用の文字であると思はれるが、今余の目的は一般洋學發達史の一部として「蘭學事始」を世に薦めることに在り、且つ明治二年の初版本を底本とするのであるから、福澤先生の文章を除いて他は割愛した。福澤先生の文章は初版本の上梓された経過を記したものであり、寧ろ初版本に添へられて然るべきものであつた。

余が校訂の底本としたのは、曾つて神田孝平先生の手澤本であつた初版本である。「蘭學事始」と、その發見者なる神田孝平先生と、神田孝平先生の手澤本なるその初版本と、此の三つを結びつけて考へて見ると多少の感慨に打たれざるを得ない。余も

洋學の片端をかちつた一人である。さうして、些か口幅つたい言ひぐさではあるが、余は、日本の文化の成長のためにといふ意識を以つて洋學をかちりつつある一人である。それ故に、その意識を人一倍強く持つてゐた玄白先生の回想録を校訂することになつたのは、余に取つて誠に喜ばしきめぐりあはせでなければならぬ。福澤先生は、

解

箕作先生と共に明和八年三月五日鐵砲洲なる蘭化先生宅最初の輪講の記事（本文五四頁）を讀んで常に感泣してゐたと告白してゐる。それは實際我をして興奮なしに

説

は讀過させない一節である。一切の道、草創の人の其の艱辛勞苦思ひやるべきなりと
磐水先生も云つて居る如く、所謂自我作古の事業は至難のものであるが、殊に艦舵
なき船の大海に乗出せしが如き境地に置かれた先行者の古を思ふ時、余は今日の完備
したる洋學研究の便宜を顧みて、非常なる刺戟を與へられる。余は、その刺戟が、願
はくば此の書の讀者にも余と同様に強からんことを希望して止まぬ者である。昭和五

13
年四月二十日、野上豊一郎。

凡例

- 一 此の書は明治二年刊行の「蘭學事始」を底本とした。
- 一 本文の句讀はすべて校訂者の理解に依つて施された。
- 一 本文中挿入の字句をば括弧「」に包んで區別した。
- 一 巻頭の寫眞は、玄白先生が濱町で開業してゐた頃、當時高砂町に住んでゐた歸一といふ彫刻師が、治療に對する謝禮として、毎日先生の診療室を訪ひ、數十日を費して作製した木彫である。永く杉田家に保存されてあつたが、先年の大震災で焼失したといふことである。此の寫眞は醫學博士藤浪剛一氏の好意に依り掲載することを得た。

杉田玄白先生略傳

先生、名ハ翼、字ハ子鳳、俗稱ハ玄白、一ニ九幸ト號ス。父ハ甫仙ト云(ヒ)、若州侯ノ醫員ニシテ、母ハ蓬田ヨモギダ玄孝ノ女ナリ。先生誕レシ時、其母難産ニテ分娩ノ後終ニ絶命ニ及ベリ。傍人皆ナ産婦ノ暈倒ヲ救ハムトテ初生兒ノ事ニ及バズ。且ツ難産ニテ分娩セル兒ナレバ定メテ死セル者ナラントテ布片ニ包ミテ之ヲ孽側ニ置ケリ。然シテ後之ヲ顧ルニ全命ナリ、且ツ男兒ナリケレバ、人々再ビ愁眉ヲ開キ、乳哺養育シテ漸ク成長ニ至レリ。甫メ十七八歳ノ時、牛山若州邸内、父ノ膝下ニ在リテ、之ニ告(ゲ)テ曰ク、不肖男、此齡ニ至ルマデ疎慢ニ日ヲ消セリ、願クバ今ヨリ新(タ)ニ良師ヲ求メ、本業ヲ習學セント。大人欣然トシテ曰ク、余汝が其言ノ出ヅルヲ待テリト。此ニ於テ當時二本履ニ住セル官醫西玄哲ト云ヘル人、外科ニ名アリケレバ、乃チ其門ニ入り從

學シ、日々怠慢ナク、風雨ヲ厭ハズシテ遠路ヲ往來セリ。又本郷ニ俗稱宮瀬三郎右衛門ト云〔ヒ〕テ、龍門先生ト號セル儒人アリ。乃チ其人ニ從ヒテ經史ヲ學ビ、之ヲ研精セリ。二十五歳ニシテ侯ヨリ部屋住料五人口ヲ賜〔ハ〕リケレバ、此時大人ニ乞フテ外宅セリ。且ツ月俸五人口ヲ以テ父ノ給ヲ待ツベカラズト約シ、遂ニ願文ヲ呈シ、許允ヲ得テ、日本橋通四丁目ニ偶居セリ。畫工楠本雲溪ノ隣家ナリシト云〔フ〕。爾後、箱屋町、堀留町等ニ轉居セリ。是レ火災ニ遭ヒシガ故ナリト云〔フ〕。三十七歳ノ時、父甫仙君歿シ給ヒケレバ、此時ヨリ新大橋ノ中邸ニ住居シテ蘭學創始ノ舉アリ。四十四歳ニテ再ビ濱町竹本藤兵衛ト云フ士人ノ地ヲ借り、之ニ外宅セリ。是ヨリ家學ヲ全備セシメントシ、突世傳來ノ「和蘭瘍科」ト唱フル書ヲ檢點スルニ、何レモ彼邦人ヨリ譯官ヲ以テ聞出〔ダ〕セル者ノミニシテ取ルニ足ラズ。又漢土ノ外科書ヲ遍ク涉獵スルニ、疎漏ニシテ何レニ適從センコトヲ知ラズ。是ニ因テ、新〔タ〕ニ日本一派ノ外科ヲ創建セント思惟シ、漢土ノ書籍中外科ニ係ル確言要語ヲ逐一撰集センコトヲ、同藩ノ

一奇士青野小左衛門ト云フ人ニ語りケレバ、士、其本業ニ切ナルヲ感賞シテ、其撰書今如何程成レリヤト問フ。否、未ダ其草ヲ起サズ、唯志ヲ發セシ迄ナリト云ヒシニ、士、之ヲ大ニ勵マシテ曰ク、足下既ニ斯〔カ〕ル大業ヲ起サントシ、何ヲ以テ猶豫シ給フヤ、是レ明日ヲ期スベキコトニアラズ、宜シク今日ヨリ筆ヲ把リ給ヘト。其言ニ深ク服シテ即夜ヨリ業ヲ始メ、「瘍科大成」ト題セル書數卷ヲ撰集セリ。其後、和蘭原書内景圖ヲ見テ臟腑筋脈ノ漢説ト大〔イ〕ニ異ナルヲ疑ヒ、刑屍ヲ解剖シテ之ヲ其圖ニ徴スルニ、其脗合符節ヲ合ハスガ如キニ驚キ、之ニ心服シ、遂ニ憤然トシテ洋書翻譯ノ業ニ從事シ、此學ヲ首唱シ給ヒケレバ、其名海外ニ轟キ、治ヲ請フ者、門前ニ市ヲナシ、晩年ニ及ンデ臺府ニ拜謁ヲ許サレ、八十五歳ニシテ館ヲ捐テ給フ。

右ハ盤水大槻先生ノ筆記シ置〔カ〕レシナ其マ、寫出シテ以テ序文ニ代フ。

明治二己巳年正月望

不肖曾孫 杉田擴玄端 謹識

蘭學事始序

蘭學事始序

是書ハ吾四世ノ祖鶴齋先生ノ遺編ナリ。粵ニ先生ノ時ヲ稽〔フ〕ルニ、世ノ士君子、耳目ノ及ブ所未ダ遠カラズ。縱ヒ博雅ノ人ト雖モ、口ヲ開キ譚ズル所ハ惟唐竺ノミニシテ、曾テ泰西ニ涉ル者ナシ。偶々一二之ニ涉ル者アルトモ、僅〔カ〕ニ常言瑣語ニ通ジテ止ミ、奥旨ヲ發シ以テ實用ニ施スヲ聞カズ。先生英邁ノ資ヲ以テ超然流俗ヲ拔キ、二三子ト謀リ、首トシテ泰西ノ學ヲ唱へ、疇曠ノ書ヲ繙キ專志研究、實ニ畢生ノ全力ヲ盡セリ。遂ニ前哲未曉ノ學ヲ啓シ、千古未洩ノ奇ヲ闡シ、二三子ト共ニ此學ノ鼻祖トハ爲リニキ。爾來諸名哲其緒ヲ繼ギ、學規漸ク拓ケ、次デ近今泰西諸國本邦ト通好セシヨリ、諸般ノ學科一時ニ勃興シ、諸國ノ載籍所在アラザルハ無ク、殆ド戶學人習ノ盛ニ至レリ。嗚呼今ノ學ヲ爲シ易キ、此ノ如クナルモ、溯リテ先生ノ古ヲ見レバ彼

ノゴトク難キナリ。抑、天下ノ事皆最勤苦ヲ歷ルノ後ニシテ始〔メ〕テ簡易ヲ得レバ、今ノ學ヲ爲シ易キ此ノ如キモ、畢竟先生輩ノ賜ニアラズト云フヲ得ズ。是書ハ只先生ノ漫筆ナレドモ、古人苦心ノ一斑ヲ窺フベケレバ、或ハ懦夫ノ志ヲ立テント思ヒ、且ツ祖先ノ功勞ヲ没セザルハ子孫ノ務メナリト思フテ、茲ニ刊行シヌ。

明治二己巳年孟春

四世孫 杉田 鶴廉 卿 謹撰

蘭學事始再版の序

「蘭學事始」の原稿は、素より杉田家に一本を秘藏せしに、安政二年、江戸大地震の火災に焼失して、醫友又門下生の中にも曾て之を謄寫せし者なく、千載の遺憾として唯不幸を嘆ずるのみなりしが、舊幕府の末年に神田孝平氏が府下本郷通を散歩の折節偶ま聖堂裏の露店に最と古びたる寫本のあるを認め、手に取りて見れば、紛れもなき「蘭學事始」にして、然かも鷗齋先生の親筆に係り、門人大槻馨水先生に贈りたるものなり。神田氏の雀躍想(ひ)見る可し。直に事の次第を學友同志輩に語り、孰れも皆先を争ふて寫(し)取り、俄(か)に數本の「蘭學事始」を得たる其趣は既に世に亡き人と思ひし朋友の再生に遭ふたるが如し。而して之を再生せしめたる恩人は神田氏にして、我輩の共に永く忘れざる所なり。書中の紀事は字々皆辛苦、就中、明和八年三月

五日、蘭化先生の宅にて「ターフル・アナトミア」の書に打向〔か〕ひ、艫舵なき船の大海に乗出〔だ〕せしが如く茫洋として寄る可きなく、唯あきれにあきれ居たる迄なり云々以下の一段に至りては、我々は之を讀む毎に先人の苦心を察し、其剛勇に驚き其誠意誠心に感じ、感極〔ま〕りて泣かざるはなし。迂老は故箕作秋坪氏と交際最も深かりしが、當時彼の寫本を得て、兩人對坐、毎度繰返しては之を讀み、右の一段に至れば、共に感涙に咽びて無言に終るの常なりき。斯くて一兩年を過ぎ、世は王政維新の變亂と爲り、都下の學友輩も諸方に散じて、東西南北唯兵馬の沙汰を聞くのみ。此時に當り、迂老は江戸に住居し、獨り目下の有様を見聞して、我國文運の命脈甚だ覺束なしと思ひ、明治元年のことなり、月日は忘れたり、小川町なる杉田廉卿氏の宅を訪ひ、天下騷然復た文を語る者なし、然るに君が家の「蘭學事始」は我輩學者社會の寶書なり、今是を失ふては後世子孫我洋學の歴史を知るに由なく、且は先人の千辛萬苦して我々後進の爲めにせられたる其偉業鴻恩を空ふるものなり、就ては方今の騷

亂中に此書を出版したりとて見る者もなかる可しと雖も、一度び木に上するときには保存の道これより安全なるべし、實に心細き時勢なれば、賣弘(めいこう)などは出來ざるものと覺悟して出版然る可し、其費用の如きは迂老が斯道の爲め、又先人へ報恩の爲めに資く可しとて、持參したる數圓金を出し懇談に及びしかば、主人も迂老の志を悦び、いよく上木と決し、其頃は原より活版とてはなく、先づ草稿を校正して版下に廻はし、櫻の版に彫刻することなれば、彼れ是れ手間取り、發兌は翌明治二年正月のことなりき。即ち今の版本「蘭學事始」上下二卷是れなり。爾後不幸にして廉卿氏は世を早ふせられ、版本も世間に多からず。然るに今回は全國醫學會に於て或は其再版ある可しと云ふ。迂老の喜び喩へんに物なし。數千部の再版書を普く天下の有志者に分布するは、即ち「蘭學事始」の萬歲にして、嘗に先人の功勞を日本國中に發揚するのみならず、東洋の一國たる大日本の百數十年前學者社會には既に西洋文明の胚胎するものあり、今日の進歩偶然に非ずとの事實を世界萬國の人に示すに足る可し。内外の士

人この書を読（ん）で單に醫學上の一小紀事とする勿れ。明治二十三年四月一日、後學
福澤諭吉、謹誌。

蘭學事始

杉田玄白手記

蘭學事始 上之卷

上

之

卷

今時世間に蘭學といふ事専ら行はれ、志をたつる人は篤く學び、無識なる者は漫りにこれを誇張す。其初を願み思ふに、昔し翁が輩二三人、不圖此業に志を興せし事なるが、はや五十年に近し。今頃かく迄に至るべしとは露思はざりしに、不思議にも盛んになりし事なり。漢學は遣唐使といふものを異朝へ遣はされ、或は英邁の僧侶などを渡され、直に彼國人に従ひ學ばせ、歸朝の後貴賤上下へ教導の爲めになし給ひし事なれば、漸く盛んなりしは尤も」の事なり。此蘭學は左様の事にも非ず。然るにかく成り行（き）しはいかと思ふに、夫醫家の事は其教へ方總て實に就くを以て先とする事ゆへ、却て領會すること速かなるか、又は事の新奇にして異方妙術も有ることの様に世人も覺（え）居る故、奸猾の徒、これを名として、名を釣り利を

射る爲に流布するものなるか。つらく古今の形勢を考〔ふ〕るに、天正慶長の頃、西洋の人漸、我西鄙に船を渡せしは、陽には交易、陰には欲する所有〔り〕てなるべし。故に其災起りしを、國初以來甚だ嚴禁なし給へりと見へたり。これ世に知る處なり。其邪教の事は知らざる所の他事なれば論なし。但し、其頃の船に乗〔り〕來りし醫者の傳來を受〔け〕たる外科の流法は世に残るも有り。これ世に南蠻流とは云ふなり。其前後より阿蘭陀船は御免有〔り〕て、肥前平戸へ船を寄せぬ。異船御禁止にたりし頃も、此國は其黨類には非〔ざ〕る次第ありて、引續き渡來を許され給へり。夫より三十三ヶ年目にて、長崎出島の南蠻人を逐ひ拂はれて、其跡へ居を移せしよし。夫よりは年々長崎の津に船を來〔た〕す事とは成りぬ。これは寛永十八年の事なるよし。其後、其船に隨從し來る醫師に、亦彼の外治の療法を傳へし者も多しとなり。是を阿蘭陀流外科とは稱するなり。是れ固より横文字の書籍を讀〔み〕て習ひ覺〔え〕し事にも非ず、只其手術を見習ひ、其藥法を聞〔き〕書〔き〕留〔め〕たる迄なり。

尤も、こなたになき所の藥品多ければ、代薬がちにてぞ病者を取扱ひし事と知らる。

一其頃西流と云ふ外科の一家出來たり。此家は、其初蠻船の通詞西吉兵衛と云へる者にて、彼國の醫術を傳へ、人に施せしが、其船の入津禁止せられて後、又阿蘭陀通詞となり、其國の醫術も傳はり、此南蠻阿蘭陀兩流を相兼ねしとて、其兩流と唱へしを、世には西流と呼びしよし。其頃は至つて珍しき事にて有りければ専ら行はれ、其名も高かりしゆへにや、後には官醫に召し出され、改名して玄甫先生と申せしよし。其男宗春と申されしは多病にて早世し給ひ、家絶へしとなり。是れ我祖甫仙翁＊の師家なり。其後召し出されし今の玄哲君の祖父玄哲先生は、玄甫先生の姪の續なりとなり。右の玄甫先生、初めて西洋醫流を唱へられしより、公儀にも御用ひ遊ばされし事にて、阿蘭陀醫事御用に立ちし始なり。

一又栗崎流といへるは、南蠻人の種子なりと。これは南蠻邪宗の徒嚴禁となり、其船の渡海も御禁制となりたれども、以前は平戸長崎の地に彼人と雜居し、妻を持ち、

蘭 學 事 始

子も有りしが、後々これをも吟味有〔り〕て、蠻人の種子の分は残らず此地を放流せられしが、其中栗崎氏にて名は「ドウ」と云ふものは、彼地に成長しても其宗には入らず、其國の醫事を學びしが、邪宗に入らざる譯を以て歸朝を許され召〔し〕歸され、長崎へ歸りし後、其術を以て大に行〔は〕れ、至て上手なりしが、人々栗崎流と稱せしよし。名の「ドウ」と云へるは蠻語露の事なるよし。後に文字を填めて道有と認〔め〕しとぞ。今の官醫栗崎君の祖なるや、又別家の栗崎なるや、詳〔か〕なる事は知らざるなり。吉田流、橋林流など云〔へ〕るは阿蘭陀通詞にて、彼方法を學び、一門戸を開きしなり。

一桂川家の事は、今の代より五世の祖甫筑先生と申せしは、^{*}文廟未だ藩邸におはせし時召〔し〕出されし御外科なり。其師家は平戸侯の醫師にて、嵐山甫安と申したるよしなり。此甫安は其侯より、出島在館の阿蘭〔陀〕外科に御託し置〔か〕れて親しく學ばせ給ひしとなり。此御家は、平戸へ入津以來、彼國の事は訣品有〔り〕て御親し

み御自由なる事のよし。又其時代は、今の如くにもなかりしにや。甫筑君其頃幼若にて門人となり、師に付添〔ひ〕て出島へ時々参られしが、専ら嵐山の流法を傳へ給ひしとなり。阿蘭陀の外科は「ダンネル」と「アルマンス」といふ人ときけり。桂川、もとは大和の國の人にて、森島氏なりしが、嵐山の流を汲むといふ意にて家苗を桂川と改め給ふとなり。今の桂川君の御祖父甫三と申せしは、翁若かりし時、常に交厚かりし御人なりし故、此事語り給へるを聞〔き〕置き侍りぬ。これを世に桂川流と稱しぬる事なり。

又古來「カスバル」流といふ外科有り。これは寛永二十年、南部山田浦へ漂流ありし阿蘭陀船の人数の内、江戸へ召〔し〕呼〔ば〕れたる中、「カスバル」某といふ外科あり、三四年留〔め〕置〔か〕れ、其療法を學〔ば〕せられし者もありしが、追々長崎へ御送りの由。江戸並に長崎にても、正保の頃、此「カスバル」より傳來の療方ありしを、詳〔か〕なる事を知〔ら〕ずとも、後に「カスバル」流と唱ふる事と申す事にや。又別に「カスバル」姓の外科渡來の事もありしか。此他長崎にて吉雄流など云へるは、其後渡來の蘭人より

傳へ得たる療方も有(り)て吉雄流とも申せり。其諸家の傳書といふ者共を見るに、皆膏藥油藥の法のみにて、委しき事なし。斯の如き類にて、備らざる事のみなれども、其業は漢土の外科には大に勝り、又本邦の古へより傳(は)りたる外治には大に勝れりといふべき歟。其中に翁が見たる檜林家の金瘡の書と云ふものあり。其中に人身中に「セイメン」といへるものあり。これは生命にあづかる大切なものなりと記せり。今を以て見れば、是れ「セーニユール」にして、神經と義譯せしものと思はる。少づかなながらこれ程の事を聞書せしは此書を始とすべし。

一國初より前後、西洋の事に付(き)てはしかく^{*}の事有(り)て、總て嚴しく御制禁仰せ出されし事ゆへ、渡海御免の阿蘭陀にても、其通用の横行の文字、讀(み)書の事は御禁止なるにより、通詞の輩も只かた假名の書留等までにて、口づから記臆^アして通辯の御用も辯せしにて、年月を経たり。左ありし事なれば、唯一人横行の文字讀(み)習ひ度(し)といふ人もなかりしなりき。然るに萬事其時至れば自ら開け整ふものなるゆへにや、

有徳廟の御時、長崎の阿蘭陀通詞西善三郎、吉雄幸左衛門、今一人何某名は忘れたりとかいふ人々申〔し〕合〔せ〕て談ぜしは、是まで通詞の家にて一切の御用向取扱に、彼文字といふものを知らず、只暗記の詞のみを以て通辯し、入組たる數多の御用を濁かつかに辯じて勤〔め〕居ることは、あまりに手薄き様なり。何卒我々斗りも横文字を習ひ、彼國書をもよむべき事御免許を蒙りなはいかに。左あらば、以來は萬事に付け事情明白に分り、御用辨よろしかるべきなり。是迄の姿にては彼國人に偽り欺〔か〕るゝ事ありても、これを糺明するの便りもなき事なりと、三人いひ合せて、此次策を申〔し〕立〔て〕、何卒御免許なし下され度〔き〕旨公へ願ひ奉りしに、御聞届〔け〕られ、至極尤〔も〕の願筋なりとて、速〔か〕に御免を蒙りしとなり。これぞ阿蘭陀渡來ありて後百年餘にして横文字學ぶ事の始なるよしなり。

一これによりて文字を習ひ覺〔ふ〕る事出來、西善三郎等先づ「コンストウワールド」といふ辭ことばの書を和蘭人より借り得しを、三通りまで寫せしよし。和蘭人これを見て

其精力に感じ、其書を直に西氏に與へしよし。斯〔く〕ありし事等、自然達ニ上聞一けると見え、和蘭書と申〔す〕もの、是まで御覽遊〔ば〕されし事なき者なり、何なりとも一本差し出し候様 上意ありしにより、何の書なりしにや、圖入の本指〔し〕出せしに、御覽遊〔ば〕され、之は圖ばかりも至〔つ〕て精密の者なり、此内の所説を讀〔み〕得るならば、亦必ず委しき要用の事あるべし、江戸にても誰ぞ學び覺へなば然るべしとの事にて、初めて御醫師野呂玄丈老〔元〕、御儒者青木文藏殿との兩人へ蒙レ仰候よしなり。之より此兩人この學を心がけられたり。然れども、毎春一度づゝ拜禮に來る阿蘭陀人に付添ひ來る通詞どもより、僅〔か〕の滯留中聞〔き〕給ふ事、殊に繁雜寸暇もなき間の事なれば、しみ／＼學び給ふべき様もなし。數年を重ね給ひし事なれども、漸く〔ソ〕、〔マ〕、〔ス〕、〔ヘ〕、〔ア〕、〔ル〕、〔ド〕、〔メ〕、〔ン〕、〔ス〕、〔ラ〕、〔カ〕、〔テ〕、〔キ〕、〔ゲ〕、〔ル〕、〔プ〕、〔ロ〕、〔イ〕、〔ム〕、〔ボ〕、〔ーム〕、〔バ〕、〔ム〕、〔ブ〕、〔ース〕、〔符〕と云ふ位の名より彼二十五字を書〔き〕習ひ給へる事のみなり。然れども是ぞ江戸にて阿

蘭陀事學び初めし濫觴なりき。

一扱、翁が友豊前中津侯の醫官前野良澤といへるものあり。此人幼にして孤となり、其伯父淀侯の醫師宮田全澤といふ人に養はれて成り立ちし男なり。此全澤、博學の人なりしが、天性奇人にて、萬事其好む所常人に異なりしにより、其良澤を教育せし所も又非常なりしとなり。其教に、人といふ者は、世に廢れんと思ふ藝能は學〔び〕置〔き〕て末々までも絶へざる様にし、當時人のすてはて、せぬ事になりしをばこれを爲して、世の爲に後に其事の殘る様にすべしと教へられしよし。如何様其教に違はず、此良澤といへる男も天然の奇士にてありしなり。専ら醫業を勵み東洞の流〔を〕信じて其業を勤め、遊藝にても、世にすたりし一節ひとよせり截を稽古して其祕曲を極め、又をかしきは、猿若狂言の會ありと聞きて、これも稽古に通ひし事もありたり。如此奇を好む性なりしにより、青木君の門に入りて和蘭の横文字と其一二の國語をも習ひしなり。

後に著せる「蘭譯筌」^{*}といふものを見るに、それより以前の事とみえしに、同藩の坂江崎といふ隠士、一日蘭書の殘篇を良澤へ見せ、これは讀みわけ解すべきものにやといひしに、是を借り受けてつくづく思ふに、國異に言殊なるといへども、同じく人のなす所にして爲すべからざる所のものあらんやと志させしに、扱これに取り付くべきの便なきを憾み居たりしことなり。夫より不圖青木先生此學に通じ給ふと聞き、遂に其門に入りてこれを學び、^{*}「和蘭文字略考」^{*}杯といふ著書を授かり、先生の學び識れる所をば聞書せりとなり。

是は其頃青木先生長崎より歸府の後の事と聞〔こ〕ゆ。先生長崎へ行かれしは延享の頃^{*}にやと思はる。良澤の入門は寶曆の末、明和の初年、歲四十餘の時なりしが、これ醫師にて常人の學べる始なるべし。

一然れども其頃は常人の漫りに横文字を取扱ふ事は遠慮せし事なり。すでに其頃本草家と呼ばれし後藤梨春^{*}といへる男、和蘭事の見聞せしを書〔き〕集め、「紅毛談」^{*}といふ假名書の小冊を著し、開板せしに、其内に彼二十五文字を彫り入れしを、何方よ

りか咎を受け、絶板となりたることもありしとぞ。

一又其のち山形侯の醫師安富寄碩といふ者、麴町に住〔み〕たり。此男長崎に遊學し、彼地にて二十五字を習ひ、且つ其文字にていろは四十七文字を綴り合はせて認め貫ひ歸り、人に誇りて彼書籍も讀〔み〕分つやうにいひ觸らせしを、翁杯も珍しき事に思ひたり。同藩中川淳庵杯は、麴町に町宅してありしが、此男より阿蘭陀文字を初〔め〕て習ひしなり。

一翁、兼〔ね〕て良澤は和蘭に志ありや否は知らず、久しき事にて年月は忘れたり、明和の初年の事なりしが、或る年の春、恒例の如く拜禮として蘭人江戸へ來りし時、良澤、翁が宅へ訪ひ來れり。これより何方へ行〔き〕給ふと問ひしに、今日は蘭人の客屋に參り、通詞に逢ふて和蘭の事を聞き、模様により蘭語杯も問ひ尋ねんがためなりといへり。翁、其頃いまだ年若く、客氣甚しく、何事もうつり易き頃なれば、願〔は〕くば我も同道し給〔は〕れ、共に尋〔ね〕試みたしと申〔し〕ければ、いと易き事

なりとて、同道して彼客屋に行きたり。其年大通詞は西善三郎と申す者参りたり。

良澤引合せにてしかくのよし申し述べたるに、善三郎聞きて、それは必ず御無用なり、夫は何故となれば、彼辭を習ひて理會するといふは難き事なり。たとへば湯水又酒を呑むといふかと問はんとするに、最初は手眞似にて問ふより外の仕かたはなし。酒をのむといふ事を問はんとするに、先づ茶碗にても持ち添へ注ぐ眞似をして口につけて、是はと問へばうなづきて、「デリンキ」と教ゆ。是れ即ちのむ事なり。扱、上戸と下戸とを問ふには、手眞似にて問ふべき仕方はなし。是は數々呑むと少々呑むにて差別わかるなり。されども多く呑みても酒を好まざる人あり、又少くのみても好む人あり。是は情の上の事なれば、なすべき様なし。扱其好き嗜むといふ事は「アーンテレッケン」といふなり。我身通詞の家に生れ、幼より其事に馴れ居ながら、其辭の意何の譯といふ事を知らず。年五十に及んで此度の道中にて其意を始めて解し得たり。「アーン」とはもと向ふといふ、

「テレッケン」とは引〔く〕事なり。其向ひ引〔く〕といふは、向ふのものを手前へ引〔き〕寄〔す〕るなり。酒好む上戸といふも、向ふの物を手前へ引〔き〕度〔く〕思ふなり。即ち好むの意なり。又故郷を思ふも斯くいふ。是又故郷を手元へ引〔き〕よせ度〔し〕と思ふ意あればなり。彼言語を更に習ひ得んとするには、簡様に面倒なるものにして、我輩常に阿蘭陀人に朝夕してすら容易に調得し難し。中々江戸などに居られて學〔ば〕んと思ひ給ふは不叶事なり。夫故野呂青木兩先生など、御用にて年々此客館へ相越され、一方ならず御出精なれども、はかばかしく御合點參らぬなり。其元にも御無用の方然るべしと異見したり。良澤は如何承りしか、翁は性急の生れゆへ其説を尤〔も〕と聞き、その如く面倒なる事をなし遂〔ぐ〕る氣根はなし、徒〔ら〕に日月を費すは無益なる事と思ひ、敢て學ぶ心はなくして歸りぬ。

一其頃より世人何となく彼國持渡りのものを奇珍とし、總〔へ〕て其舶來の珍器の類を好み、少しく好事ときこえし人は、多くも少くも取〔り〕聚〔め〕て常に愛せざるはな

し。殊に故の相良侯當路執政の頃にて、世の中甚だ華美繁花の最中なりしにより、

彼舶より「ウエールガラス」水晶、「テルモメートル」寒暑、「ドンドルガラス」硝子、「ホ

クトメートル」水液輕重、「ドンクルカームル」硝室、「トーフランターレン」現狀、「ゾ

ンガラス」硝子、「ルーブル」貨幣、といへる類ひ種々の器物を年々持ち越し、其餘諸

種の時計、千里鏡、ならびに硝子細工物の類、あげて數へがたかりしにより、人々

其奇巧に甚だ心を動かし、其窮理の微妙なるに感服し、自然と毎春拜禮の蘭人在

府中は其客屋に夥しく聚るやうになりたり。何れの年といふことは忘れしが、明

和四五年の間なるべし、一とせ甲必丹は「ヤン・カランス」、外科は「バブル」とい

ふもの、來りし事あり。此「カランス」は博學の人、「バブル」は外科巧者のよしな

り。大通詞吉雄幸左衛門は専ら此「バブル」を師としたりと。幸左衛門後、幸作、號は

外科に巧みなりとて名高く、西國中國筋の人長崎へ下り、其門に入る者至つて多

し。此年も蘭人に附添ひ來れり。翁、夫等の事を傳へ聞きしゆへ、直に幸左衛

門が門に入り、其術を學べり。これによりて日々彼客屋へ通ひたり。一日右の「バブル」、川原元伯といへる醫生の舌疔を診ひて療治し、且「つ」刺絡の術を施せしを見たり。扱々手に入りたるものなりき。血の飛び出す程を預め考へ、これを受「く」るの器を餘程に引「き」はなし置「き」たるに、飛迸の血てうど其内に入りたりき。是れ江戸にて刺絡せしの始なり。其頃、翁、年若く、元氣は強し、滯留中は怠慢なく客館へ往來せしに、幸左衛門一珍書を出し示せり。これは去年初「め」て持「ち」渡りし「ヘーステル」ハの「シムルゼイン」ハといふ書なりと。我深く懇望して境樽貳拾挺を以て交易したりと語れり。これを披き見るに、其書説は一字一行も讀む事能はざれども、其諸圖を見るに、和漢の書とは其趣大に異にして、圖の精妙なるを見ても心地開くべき趣もあり。よりて暫く其書をかり受け、せめて圖ばかりも摸し置「く」べきと、晝夜寫しかゝり、彼在留中に其業を卒へたり。これによりて或は夜をこめて鶏鳴に及びたりし事もありき。

一又、年は忘れたり、一春、かの幸左衛門、阿蘭陀附添にて参府せし頃、豊前中津邸にて昌庶公の御母君御座内にて不慮に御脛を折傷し給ひし事あり。貴人の事なれば大騒ぎにて、彼是醫師を御招きの處、幸ひに吉雄幸左衛門出府居合せ候事ゆへ、直に御招きありて、御療治被_レ仰付、御順快ありたり。此時前野良澤、御手醫師の事ゆへ、懸合仰〔せ〕付〔け〕られ、格別懇意となりたり。これ等、蘭學の世に開くべき一つといふべし。其後其主の供にて中津へ行〔き〕しかば、候へ願ひ奉りて彼方へ下り、専ら吉雄、楢林等に従ひて百日斗りも逗留し、晝夜精一に蘭語を習ひ、先に青木先生より學びし「類語」と題せる書の諸言を本として復習訂正し、なほこれに足し補ひて僅〔か〕に七百餘言を習ひ得、彼國の字體文章等の事等も荒増し聞書して持歸りし事ありたり。此時少々は蘭書も求〔め〕て歸府せり。是れ長崎へ外治稽古の爲〔め〕ならで彼書說學ばんとて参りし人の始めなり。

一和蘭は醫術並びに諸々の技藝にも精しき事と世にも漸く知り、人氣何となく化せら

れ來れり。此頃よりも専ら官醫の志ある方々は年々對話といふ事を願ひて彼客屋へゆき、療術方藥の事を聞〔き〕給ひ、又天文家の人も同じく其家業の事を問ひ給へり。當時は其人々の門人なれば同道し給へる事も自由なり。左あるにより、其方々の門人と唱へ、出入もありたり。長崎は御常法ありて猥りに旅館への出入はならぬ事なるに、江戸は暫くの間の事なれば、自然と構もなき姿なりき。其頃平賀源内といふ浪人者あり。此男業は本草家にて生〔れ〕得て理にさとく、敏才にしてよく時の人氣に叶ひし生れなりき。何れの年なりしか、右にいふ「カランス」といへる加比丹參向の時なりしが、或る日、彼客屋に人集〔ま〕り酒宴ありし時、源内も其座に列なりありしに、「カランス」戲に一つの袋を出し、此口試みに明け給ふべし、あけたる人に參らすべしといへり。其口は智惠の輪にしたるものなり。座客次第に傳へさまゞ工夫すれども、誰も開き兼〔ね〕たり。遂に末座の源内に至れり。源内これを手に取り暫く考へ居しが、乍ち口を開き出せり。座客はいふに及ばず、「カランス」

も其才の敏捷なるに感じ、直に其袋を源内に與へたり。これよりして甚だ親しみ厚くなり、其後は度々客屋に至り、物産の事を尋(ね)問へり。又ある日、「カランス」一つの棋子の如き形の「スランガストーン」といふ物を出し示せり。源内これを見て其功用を問ひ歸り、翌日別に新(た)に一箇の物を作り出して持ち行き、「カランス」に見せたり。「カランス」是を見て、これは前日見せし物と同品なりといへり。源内曰く、示さるゝ所の品は貴國の産物か、又外國にて求め給へるものかと問ふに、これは印度の地方別意蘭セイロンと云ふ所にて求め來れりと答ふ。源内又問(ふ)て曰く、其國にては如何なる所に産するものといへば、「カランス」曰く、其國にて傳(ふ)る所は、此物大蛇頭中より出づる石なりといへり。源内聞(き)て、それは左様にあるまじ、是は龍骨にて作りし物なるべしと云ふ。「カランス」聞(き)ていふ、天地の間に龍といふものはなき物なり、如何にして其骨にて作るべしとといへり。是に於て、源内己が故郷なる讚州小豆島より出せる大なる龍齒につゞきたる龍骨を出

し示して是即ち龍骨なり、本草綱目といへる漢土の書に、蛇は皮を換へ、龍は骨を換ふと説けり。今我示す所の「スランガステーン」は此龍骨にて作れる物なりといへり。「カランス」聞〔き〕て大ひに驚き、益々其奇才に感じたり。これによりて本草綱目を求め、右の龍骨を源内より貰ひ得て歸れり。其返禮として「ヨンストンス」禽獸譜、「ドトニース」生植本草、「アンボイス」貝譜などいへる物産家に益ある書物共を贈りたり。是等の事も直接對話にて辯じたる事にはあらず。附き添〔ひ〕たる内通詞部屋附などいへる者にて、其情を通じて辯ぜしことにて、一字一言通知せしことにはあらず。其後源内彼地へ遊歴し、蘭書、蘭器なども求め來り、且つ「エレキテル」といへる奇器を手に入れ歸府し、其機用の事をも漸く工夫して、遍く人を驚〔か〕せり。

一此風右の如く成り行けども、西洋の事に通じたりといふ人もなかりしが、只何となぐ此事遠慮することもなきやうになりたり。蘭書杯所持すること御免といふ事は

なけれども、間々所持する人もある風俗に移り來れり。同藩の醫中川淳庵は、本草を厚く好み、和蘭物産の學にも志ありて、田村藍水、同西湖先生杯とも同志にて、每春參向せる阿蘭陀通詞共の方にも往來せり。明和八年かとの卯の春かと覺えたり、彼客屋へ至りて「ターヘル・アナトミア」と「カスバリュス・アナトミア」といふ身體内景圖説の書二本を取り出し來り、望〔む〕人あらばゆづるべしといふ者ありとて持〔ち〕歸り、翁に見せたり。もとより一字もよむ事はならざれども、臟腑、骨節、これまで見聞する所とは大〔い〕に異にして、これ必ず實驗して圖説したるものと知り、何となく甚だ懇望に思へり。且つ吾家も從來阿蘭陀流の外科と唱ふる身なれば、せめて書篋の中にもそなへ置〔き〕たきものと思へり。然れども其頃は家甚だ窶しくして、これを求〔む〕るに力及びがたかりしにより、我藩の太夫岡新左衛門といへる人の許に持〔ち〕行き、しかくの次第なれば此蘭書求め度〔し〕と告〔げ〕たり。然れども力の足らざるは是非なしと語りしかば、新左衛門聞き、それは求め

置〔き〕て用立つものか、用立つものならば價は上より下し置かるべき様取計ふべしといへり。其時、翁、それは必ずかうといふ目當逆はなけれども、是非ともに用立つものにして、御目に掛くべしと答へり。傍に小倉小左衛門後藤と改むといふ男居たりしが、それは何卒調へ遣さるべし、杉田氏はこれを空〔し〕くする人にはあらずと助言したり。依之、いと心易く願も望の如く調ひ得たり。是れ翁の蘭書手に入りし始めなり。

一扱、毎々平賀源内などに出席〔ひ〕し時に語り合〔ひ〕しは、逐々見聞する所、和蘭實測究理の事共は驚〔き〕入りし事ばかりなり、若し直に彼國書を和解し見るならば、格別の利益を得る事は必せり、されども是まで其所に志を發する人のなきは口惜〔し〕き事なり、何とぞ此道を開くの道はあるまじきや、逆も江戸杯にては及ばぬ事なり、長崎の通詞に託して讀み分けさせ度〔き〕事なり、一書にても其業成らば大なる國益とも成るべしと、只其及びがたきを嘆息せしは、毎度の事なりき。然れども

空しくこれを慨嘆するのみにてありぬ。

一然るに此節不思議に彼國解剖の書手に入りし事なれば、先〔づ〕其圖を實物に照し見
たきと思ひしに、實に此學開くべきの時至りけるにや、此春其書の手に入りしは、
不思議とも妙とも云〔は〕んか。抑々頃は三月三日の夜と覺へたり。時の町奉行曲淵
甲斐守殿の家士得能萬兵衛といふ男より手紙もて知らせしは、明日手醫師何某とい
へる者、干住骨ヶ原にて腑分＊いたせるよしなり。御望あらば彼方へ罷り越〔さ〕れよ
かしと言〔ふ〕文をこしたり。兼〔ね〕て同僚小杉玄適＊といふもの、其以前京師の山脇
東洋先生の門に遊び、彼地に在〔り〕し時、先生の企にて觀臟の事ありしに、此男に
從ひ行〔き〕て親しく視たるに、古人〔の〕諸説皆空言にて信じ難き事のみなり。上古
は九臟と稱せり、今五臟六腑の目を分ちたるは後人の杜撰なりなどいへる事の話
もありし。其時東洋先生「臟志」といふ著書をも出〔だ〕し給ひたり。翁、其書をも
見し上の事なれば、よき折あらば翁も自ら觀臟してよと思ひ居たりし。此時和蘭解

割の書も初〔め〕て手に入〔り〕し事なれば、照し視て何れか其實否を試むべしと喜び、一かたならぬ幸の時至れりと彼處へ罷る心にて殊に飛揚せり。扱、斯〔か〕る幸を得し事を、獨り見るべき事にもあらず、朋友の内にも家業に厚き同志の人々へは知らせ遣はし、同じく視て業事の益には相互になしたきものと思ひ量りて、先〔づ〕同僚中川淳庵を初め、某誰と知らせ遣はせし中に、良澤へも知らせ越したり。扱、良澤は翁よりも亂^{*}十ばかりも長じ、我よりも老輩の事にてありし故、相識にこそあれ、常とは往來も稀に、交接うとかりしかど、醫事に志篤きは互ひに知り合〔ひ〕たる中なれば、此一舉に漏〔ら〕すべき人にはあらず。先〔づ〕早く申〔し〕通じたく思ひたれども、さし掛〔か〕りし事、且つ此夜も蘭人滞留の折なれば彼客屋にありけるゆへ、夜分にはなりぬ、俄〔か〕に知らすべき便りもなし、如何せんと存せしが、臨時の思付にて先〔づ〕手紙調へ、知れる人の許に立寄り、相謀りて本石町の木戸際に居たりし辻駕の者をやとひ、申〔し〕遣せしは、明朝しかくの事あり、望あらば早天に淺

草三谷町出口の茶屋まで御越しあるべし、翁も此處まで罷（り）越し待（ち）合（は）すべしと認め、置捨にて歸れと持（た）せ遣（は）しけり。

一其翌朝とく支度整（び）ひ、彼所に至りしに、良澤参り合（ひ）ひ、其餘の朋友も皆々參會し、出迎（へ）たり。時に良澤一つの蘭書を懐中より出（だ）し、披（き）き示して曰く、これは是れ「ターヘル・アナトミア」といふ和蘭解剖の書なり、先年長崎へ行きたりし時求め得て歸り、家藏せしものなりといふ。これを見れば、即ち翁が此頃手に入りし蘭書と同書同版なり。是れ誠に奇遇なりとて、互（ひ）ひに手をうちて感ぜり。扱、良澤長崎遊學の中、彼地にて習（ひ）得、聞（き）置（き）しとて其書をひらき、これは「ロング」とて肺なり、これは「ハルト」とて心なり、「マールグ」といふは胃なり、「ミルト」といふは脾なりと指し教へたり。然れども漢説の圖には似るべくもあらざれば、誰も直に見ざる中は心中にいかによと思ひしことにてありき。

一これより各々打連（れ）立（ち）て骨ヶ原の設け置（き）し觀臟の場へ至れり。扱、腑分

の事は、穢多の虎松といへるもの、此事に巧者のよしにて、兼〔ね〕て約し置〔き〕しよし、此日も其者に刀を下さすべしと定めたるに、その日、其者俄〔か〕に病氣のよしにて、其祖父なりといふ老屠、齡九十歳なりといへる者、代りとして出〔で〕たり。健〔か〕なる老者なりき。彼奴は、若きより腑分は度々手にかけて、數人を解〔き〕たりと語りぬ。その日より前述の腑分といへるは、穢多に任せ、彼が某所をさして肺なりと教へ、これは腎なりと切り分け示せり。夫を行き視し人々看過して歸り、我々は直に内景を見究めしなどいひしまでの事にてありしとなり。固より臟腑に其名の書〔き〕記してあるものならねば、屠者の指し示すを覩て落着せしことにて其頃までのならひなるよしなり。其日も彼老屠が彼れの此れのと指し示し、心、肝、膽、胃の外に其名なきものをさして、名は知らねども、己れ若きより數人を手にかけ解き分けしに、何れの腹内を見ても此處にかやうの物あり、彼處に此物ありと示し見せたり。圖によりて考〔ふ〕れば、後に分明を得し動脈の二幹又小腎などにて

ありたり。老屠又曰〔く〕、只今まで腑分の度々其醫師がたに品々をさし示したれども、誰一人某は何、此は何となりと疑〔は〕れ候御方もなかりしといへり。良澤相俱に携ひ行〔き〕し和蘭圖に照〔ら〕し合せ見しに、一として聊か違ふ事なき品々なり。

古來醫經に説〔き〕たる所の、肺の六葉兩耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形狀も大〔い〕に古説と異なり。官醫岡田養仙老、藤本立泉老などは其ころまで七八度も腑分し給ひし由なれども、皆千古の説と違ひしゆへ、毎度々々疑惑して不審聞けず。其度々に異狀と見しものを寫し置〔か〕れ、つらく思へば、華夷人物違ありやなど著述せられし書を見たる事もありしは、これが爲なるべし。扱、其日の解剖事終り、とてもこの事に骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨共を拾ひとりて、かすく見しに、舊説とは相違にして、只和蘭圖に差へる所なきに、皆驚嘆せるのみなり。

其日の刑屍は、五十歳ばかりの老婦にて、大罪を犯せし者のよし。もと京都生れにて、あ

だ名を青茶婆と呼〔ば〕れしものとぞ。

一歸路は、良澤、淳庵と、翁と、三人同行なり。途中にて語り合〔ひ〕しは、扱々今日の實驗、一々驚〔き〕入〔る〕。且〔つ〕これまで心付〔か〕ざるは耻〔づ〕べき事なり。苟〔く〕も醫の業を以て互〔ひ〕に主君々々へ仕〔ふ〕る身にして、其術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今迄一日々々と此業を勤め來りしは面目もなき次第なり。何とぞ、此實驗に本づき、大凡にも身體の眞理を辨へて醫をなさば、此業を以て天地間に身を立〔つ〕るの申譯もあるべしと、共々に嘆息せり。良澤もげに尤〔も〕千萬、同情の事なりと感じぬ。其時、翁、申せしは、何とぞ此「ターフル・アナトミア」の一部、新たに翻譯せば、身體内外の事分明を得、今日療治の上の大益あるべし、いかにもして通詞等の手をからず、讀み分けたきものなりと語りしに、良澤曰く、予は年來蘭書よみ出〔だ〕し度〔き〕の宿願あれど、これに志を同〔じ〕うするの良友なし。常々これを慨き思ふのみにて日を送れり。各がた彌々これを欲し給はば、

我前の年長崎へもゆき、蘭語も少々は記憶し居れり。それを種として共々よみ掛
 「か」るべしやといひけるを聞「き」、それは先づ喜ばしきことなり、同志に力を戮せ
 給「は」らば、憤然として志を立て、一精出し見申さんと答へたり。良澤これを聞き、
 悦喜斜「め」ならず。然らば善はいそげといへる俗説もあり、直に明日私宅へ會し給
 へかし、如何やうにも工夫あるべしと、深く契約して、其日は各々宿所々々へ別れ
 歸りたり。

編 事 始

一其翌日、良澤が宅に集「ま」り、前日のことを語り合ひ、先づ、彼「ターフル・アナ
 トミア」の書にうち向ひしに、誠に艱難なき船の大海に乗「り」出「だ」せしが如く、
 茫洋として寄「る」べきなく、只あきれにあきて居たる迄なり。されども、良澤は
 兼「ね」てより此事を心に掛け、長崎迄もゆき、蘭語並びに章句語脉の間の事も少し
 は聞「き」覺へ、聞「き」ならひし人といひ、齡も翁などよりは十年の長たりし老輩な
 れば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐ事となしぬ。翁は、いまだ二十五字さへ習

はず、不意に思ひ立〔ち〕し事なれば、漸くに文字を覺へ、彼諸言をもならひしことなり。

上
之
卷
一扱、此書をよみ、如何様にして筆を立〔つ〕べしと談し合〔ひ〕しに、迎も始より内象の事は知れがたかるべし、此書の最初に仰伏全象の圖あり、これは表部外象の事なり、其名處は皆知れたる事なれば、其圖と説の符號を合せ考〔ふ〕ることは、取付きやすかるべし、圖の初とはいひ、かたゞ先づこれより筆を取り初むべしと定めたり。即ち「解體新書」形體名目篇これなり。其ころは「^{*}デ」の「^{*}ヘット」の又「^{*}アルス・ウエルケ」等の助語の類も、何れが何やら心に落付〔き〕て辨へぬ事ゆへ、少しづつは記臆〔おそ〕せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば、眉といふものは目の上に生じたる毛なりと有るやうなる一句、彷彿として、長き日の春の一日には明らめられず。日暮〔る〕る迄考へ詰め、互〔ひ〕ににらみ合〔ひ〕て、僅〔か〕一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにて有りしなり。又或る日、鼻の所に

て「フルヘッヘンド」せしものなりとあるに至りしに、此語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。其頃「ウォールデンブック」譯解といふものなし。ようやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合せたるに、「フルヘッヘンド」の釋註に、木の枝を斷ちたる迹、其迹「フルヘッヘンド」をなし、又庭を掃除すれば、其塵土聚まり「フルヘッヘンド」といふ様によみ出せり。これは如何なる意味なるべしと、又例の如くこじつけ考ひ合ふに、辨へ兼ねたり。時に、翁思ふに、木の枝を斷りたる跡癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土あつまればこれもうづたかくなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、「フルヘッヘンド」は堆ウツタカシといふことなるべし。然れば此語は堆と譯しては如何といひければ、各々之を聞きて甚だ尤もなり、堆と譯さば正當すべしと決定せり。其時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の玉を得し心地せり。如此事にて推して譯語を定めり。其數も次第こゝに増しゆく

事となり、良澤のすでに覺〔え〕居し譯語書き留をも増補しけるなり。其中にも「シ
ンネン」精神などいへる事出〔で〕しに至〔り〕ては、一向に思慮の及びがたき事も多か
りし。これらは亦往ゆとは可解時も出来ぬべし。先づ符號を付〔け〕置〔く〕べしとて
丸の内に十文字を引きて記し置〔き〕たり。其頃不_レ知ことをば轡十文字と名〔づ〕け
たり。毎會いろ／＼に申〔し〕合せ、考へ案じても、解すべからざる事あれば、其苦
〔し〕さの餘り、それも又くつわ十文字／＼と申〔し〕たりき。然れども爲すべき事は
固より人に在り、成るべきは天にありの喩の如くなるべしと、如_レ此思ひを勞し、
精を研り、辛苦せしこと一ヶ月に六七會なり。其定日は怠りなく、わけもなくして
各々相集〔ま〕り會議して讀〔み〕合ひしに、實に不味者は心とやらにて、凡そ一年餘
も過〔ご〕しぬれば、譯語も漸く増し、讀〔む〕に隨ひ自然と彼國の事態も了解する様
にて、後々は其章句の疎おぼきは、一日に十行も、其餘も、格別の勞苦なく解し得る
やうにもなりたり。尤〔も〕毎春參向の通詞どもへも聞〔き〕糺せし事もあり。又其間

には解屍の事もあり。亦獸畜を解きて見合(は)せし事も度々のことなりき。

蘭學事始 下之卷

下

之

卷

一此會業怠らずして勤〔め〕たりし中、次第に同臭の人も相加〔は〕り寄りつとどふ事なりしが、各々志す所ありて一樣ならず。翁は一たび彼國解剖の書を得、直に實驗し、東西千古の差ひあることを知り明らかめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも、發明ある種にもなしたく、一日もはやく此一部を用立つ様になし見度〔し〕と志を起せし事ゆへ、他に望む所もなく、一日會して解する處は其夜翻譯して草稿を立て、それに付きては其譯述の仕かたを種々様々に考へ直せし事、四年の間、草稿は十一度迄認〔め〕かへて板下に渡すやうになり、遂に「解體新書」翻譯の業成就したり。抑々江戸にて此學を創業して、腑分といひ古ふるりしことを新〔た〕に解體と譯名し、且〔つ〕社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、我わが東方とうほう閩州いんしゅう自然と通稱と

なるにも至れり。是れ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり。今を以て考〔ふ〕れば、是迄二百年來、彼外科法は傳はりしなれども、直に彼醫書を譯するといふ事は絶〔え〕てなかりしが、此時の創業不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書、其新譯の起始となりしは、不用意を以て得る所にして、實に天意とやいふべし。

學 一過ぎこしかたを願〔み〕るに、未だ「新書」の卒業に至らざるの前に、斯の如く勉勵すること兩三年も過ぎしに、漸々其事體も辨するやうになるに隨ひ、次第に蔗を噉ふが如くにて、其甘味に喰ひつき、これにて千古の誤も解け、其筋たしかに辨へ得し事に至るの樂しく、會集の期日は、前日より夜の明〔く〕るを待〔ち〕兼〔ね〕、兒女子の祭り見にゆくの心地せり。扱、都下は浮華の風俗なれば、他の人もこれを聞

〔き〕傳へ、雷同して社中へ入〔り〕來りしものもありたり。其時の人々を思ふに、遂〔ぐ〕るも遂〔げ〕ざるも、今は皆鬼籙上の人のみ多し。嶺春泰*、鳥山松圓*といへる男

などは、頗る出精せしが、今は則ち亡し。同僚淳庵なども「新書」上木の後なりけれども、五十に滿たずして世を早うせり。其ころ往來せし者にて、今に生（き）残りしは、翁よりは、はるか歳下の人なれども、弘前の醫官桐山正哲までなり。又其頃此業の着實なるを知れるものは格別、たへて知らざるものは大（い）に怪しみ疑ふもの多かりき。扱、集り來りたる者の内にも、其業のはかくしからず、それと突き留めもなき面倒なる事ゆへ、遂に精力盡きはて、又は今日の生計に逐（は）るゝ人は其しるし見へざるに倦み、且つは已むを得ず中道にして廢するといへる族（やぶ）も多かりき。又偶々志厚かりし者も、多病にして事ならず、早世せしも數多ありたり。最初より會合ありし桂川甫周君は、天性穎敏、逸群の才にてありしゆへ、彼文辭章句を領解し給ふ事も萬端人より早く、未だ弱齡とは申（せ）、社中にも末頼母敷芳しとて賞嘆したりき。尤（も）其家代、阿蘭陀流外科の官醫なる上、其父甫三君は青木先生より「アベセ」二十五字をはじめ、僅（か）ながらも蘭語なども傳（は）り給ひしを

聞〔き〕覺へ、少しは其下地もありし故にや、退屈のやうすもなく、會ごとには怠りなく出席したまへり。

一 同盟の人々毎會右の如く寄〔り〕つどひし事かくありしといへども、各々其志す所異なり。是れ實に人の通情なり。先づ第一の盟主とする所の良澤は、奇異の才ゆへ、此學を以て終身の業となし、盡く彼言語に通達し、其力を以て西洋の事體を知り、彼書籍何にても讀〔み〕得たきの大望ゆへ、其目的とする所「康熙字典」などの如き「ウォールデンブック」を解了せんといふ事に深く意を用ひたり。それゆへ世間浮華の人に多く交る事を厭ひたり。

此學開開〔く〕べき天助の一ツには、良澤といふ人、天性多病と唱へ、此頃よりは常に閉戸して外へも出〔で〕ず、亦漫りに人にも交らず、恃〔た〕此業を以て樂みとし、日を消し居れり。其君昌庶公は其素心の情合をよく知召し、彼は元來異人なりとて深く咎〔め〕もし給はず。然れども本務に怠りがちなりければ、勤〔め〕方疎漫なりと上へ告〔げ〕奉りし人もありしに、

公の曰く、日々の治業をつとめるも勤めなり、又其業のためをなし、終には天下後世生民の有益たる事を爲〔さ〕んとするも、取りも直さず、其業を勤〔む〕るなり。彼は欲する所ありと見ゆれば、其このむ所に任せ置くべしとて、一向に打〔ち〕捨〔て〕さし置〔か〕れたり。すでに其前後「ホイセン」名「プラクテーキ」名杯いへる内科書を求められ、其紙端に御印章押し給ひて與へ給ひし事もあり。元來其號を樂山と呼びしが、高年の後、自ら蘭化と稱せり。これは昔し君侯より賜〔は〕りし名なりと。これは君侯常に良澤は阿蘭陀人の化物なりと御戯れにの給ひしより出〔で〕たり。其寵遇かくの如き事にてありたり。これ故、良澤心のまゝに其學の修行出來たる事なり。扱、浮華の輩、雷同して従事せしも多かれども、創業の迂遠なるに倦〔み〕て廢するもの少からざりしに、此先生、生涯一日のごとく、確乎として動かざりしゆへ、其中には今の如く其業を遂げしもあることと思はるゝなり。これ全く此事開くるの時に遭ひしゆへにや。

又中川淳庵は、兼〔ね〕て物産の學を好める故、何とぞ此業を勤め、海外物産をも知り明らめたき事を欲せり。

亦傍ら奇器巧技の事を嗜み、自ら工夫を凝こらして新製せるも少からず。「和蘭局方」を譯し掛かりしに業を卒へず、天明の初年隔症を患ひて千古の人となれり。

桂川君はさしてこれといふ目當とは見へねども、前にもいへる家柄なれば、只何となく此事をこのみ給ひ、齡は若し、氣根は強し、會毎に來り給ひて此舉に加はり給へり。翁はこれらとは大いに違ひ、始めて觀臟し和蘭圖に徴して千古の差あるに驚き、いかにも先づ此一事を早くあきらめ、治療の用を助けたく、又、世醫法術發明の間にも用立つやうになしたき志のみなりければ、何とぞ一日も早く速かに此一部見るべきものとなしなんと心掛け、此一書の譯をし、其事成らば望足りぬと心を決し、思を興せしに依て、深く彼諸言を覺へ、他事を爲すの望はなかりしなり。五色の糸の亂れしは皆美なるものなれども、赤とか黄なるとか一色に決し餘は皆きり棄つる心にて思ひ立ちしなり。其節思憲しんするに、應神帝の御時百濟の王仁初めて漢字を傳へ書籍を持ち渡りてより、代々の天子、學生を異朝へ遣

關 學 事 始

はされ、彼書を學ばせ給ひ、數千歳の今に至りて始めて漢人にも耻〔ぢ〕ざる漢學出來る程になりたるなり。今首めて唱へ出〔だ〕せるの業、何として俄〔か〕に事整ふて成就すべきの道理なし。只人身形體の一事、千載所説の違〔ひ〕たる所を世に示し、何とぞ其大體を知らせたく思ひし迄にて、他に望む所なしと一決し、右にもいへる如く、一日會して解せし所を其夜宿に歸りて直に翻譯し記しため置〔き〕たるなり。同社の人々翁が性急なるを時々笑ひしゆへ、翁答へけるは、凡そ丈夫は草木と共に朽〔つ〕べきものならず、かたゞは身健かに齡は若し、翁は多病にて歳も長けたり、往々此道大成の時には迎も逢ひがたかるべし。人の生死は預め定めがたし。始〔め〕て發するものは人を制し、後れて發するものは人に制せらるといへり。此故に翁は急ぎ申すなり。諸君大成の日は翁は地下の人となりて草葉の蔭に居て見侍るべしと答〔へ〕ければ、桂川君などは大〔い〕に笑ひ、後々は翁を渾名あだなして草葉の蔭と呼び給へり。斯〔か〕ることにて年月は過〔ぎ〕行き、白駒の隙過〔ぐ〕るよりも早く、とかく

せし間に三四年の月日を重ね、逐々世の人も聞き傳へて尋ね来るもありしゆへ、西洋所説の臟腑、經絡、骨節、等、其既に知る所を以て大凡は其眞面目を語り示せるほどにはなりたり。

一「解體新書」未だ上木の前なりしが、奥州一ノ關の醫官建部清庵正由といへる人、はるかに翁が名を聞き傳へて、平生記し置きたる疑問を送りし事あり。其書に記せし事ども、我業に就きては感嘆する事多く、これまで相識れる人にもあらず、翁と志を同じうするも千里一契なり。其書にいふ、これまでの阿蘭陀流外科片假名書の傳書を此術の基とするまでなるは、扱々殘念なり、世に有識の人出でて昔し漢土にて佛經を翻譯せしごとくに阿蘭陀の書をも和解なしたらば、正眞の阿蘭陀醫流成就すべしと記せられたり。これは其時より二十餘年前よりの懸念ときこへたり。實に其見解感するも餘りあり。はからずも翁其人にあたりしを抑躍し、吾等の知己千載の一奇遇なりと答書を報じ、夫より往復絶えずして書信を通じ、其緣によ

りて品々の事もあり。門人等其書通を書きあつめ「蘭學問答」と名(づ)け留(め)たり。

後に子弟等藏版となしぬ。「和蘭醫事問答」と題せしものはこれなり。

一翁は元來疎漫にして不學なるゆへ、可成りに蘭説を翻譯しても、人のはやく理會し曉解するの益あるやうになすべき力はなし。去れども、人に託しては我本意も通じがたく、やむことなく拙陋を顧みずして自ら書(き)綴れり。其中に精密の微義もあるべしと思へる所も、解しがたき所は疎漏なりと知りながらも、強(ひ)て解せず。惟意の達したる所ばかりを擧(げ)置(き)けるのみなり。譬へば、京へ上らんと思ふには、東海東山二道ある事を知り、西へくへ行けば、終には京へ上り着くといふ所を第一とすべしと、其道筋を教(ふ)るまでなりと思ふ所より、其荒増の大方ばかりを唱へ出(だ)せしなり。これを手初にして世醫の爲に翻譯の業を首唱せしなり。

素より浮屠氏翻譯の法は辨へず、殊に和蘭書翻譯といふ事は、只今になき所の最初

なれば、此讀み初〔め〕の時にあたり、細密なる所は固より辨すべき様もなし。只幾重にも、醫たるものゝ、先〔づ〕第一に、臟腑内景諸器の本然官能を知らずしては濟〔ま〕ず。何とぞ各其實を辨へて互〔ひ〕に治療の助になさばやと思へるが本意ばかりなり。此志ゆへ、此譯をいそぎて早く其大筋を人の耳にも留〔ま〕り解し易くなして、人々是まで心に得し醫道に比較し、速〔か〕に曉り得せしめんとするを第一とせり。

夫故、なるたけ漢人稱する所の舊名を用ひて譯しあげたく思ひしなれども、此に名〔づく〕るものと彼に呼ぶものとは相違のもの多ければ、一定しがたく當惑せり。彼是考へ合〔は〕すれば、逆も我より古をなすことなれば、いづれにしても人々の曉し易きを目當として定〔む〕る方と決定して、或は翻譯し、或は對譯し、或は直譯、義譯と、さまざまに工夫し、彼に換へ、此に改め、晝夜自ら打掛〔か〕り、右にもいへ

る如く草稿は十一度、年^{*}は四年に満ちて、漸く其業を遂げたり。尤〔も〕其頃は彼國俗の精密微妙の所は明了すべき事にはあらず、今の如く思ひよらず開けし所より見

る人はさぞ誤解のみといふべし。首めて唱〔ふ〕る時にあたりては、なか／＼後の譏りを恐るゝ様なる碌々たる了簡にて企事は出来ぬものなり。くれ／＼も彼大體に本〔づ〕きて合點の行〔き〕し所を譯せしまでなり。梵譯の四十二章經も漸々今の一切經に及べり。是翁が其頃よりの宿志にして企望せし所なり。世に良澤といふ人なくば此道開くべからず。且〔つ〕翁が如き素意大略の人なくば此道かく速かに開くべからず。是も亦天助なるべし。

一扱、右の如く、一通り譯書出来たれども、其頃は蘭説といふ事少しにても聞〔き〕及び聞〔き〕知〔れ〕る人絶えてなく、世に公にせし後は、漢説のみ主張する人は、其精粗を辨ぜず、これ胡説なりと驚き怪みて見る人もなかるべしと思ひ、先づ「解體約圖」と云〔ふ〕ものを開板して世に示せり。是は俗間にいふ報帖ひきだ同様のものにてありたり。

此業江戸にて首唱し、二三年も過〔ぎ〕しころ、年々拜禮に參向する阿蘭陀便にて長崎にも

聞〔き〕傳へ、蘭學といふ事江戸にて大〔い〕に開けしといふこと、通詞家などにては忌み憎みしよし。左もあるべし。如何さま、其ころまでは、彼家は通詞迄の事にて、書物讀〔み〕て翻譯する杯いふ事もなかりし時節にて、冷めしをさむめしといひ、一部一篇とも譯すべき「エーシテール」といふ語を、一のわかれ二の分れと和解し、通じ合ひて事済む様なる事にてありしと見へたり。尤〔も〕、醫說内景杯の事に至りては、誰一人知る人なき管なり。或る一譯士、此「約圖」を見て、「ゲール」といふものは身體中にはなし、「ガル」の誤なるべし、「ガル」は即ち膽なりと不審せしとなり。但、此前後よりして翁が輩關東にて創業の一舉ありしにより、其根元たる西肥の通詞輩の志をも大〔い〕に引立〔て〕しかと知らるゝなり。

一「約圖」既に成り、本篇も出版にも成りしかども、前條にいへるごとく、「紅毛談」さへ絶版となりし程の事なれば、西洋の事は假初にも唱ふる事はならぬ事にや、併し、和蘭は其中にても各別なるにや否の所不分明にて、屹度これは苦しからずといふ事も決しがたく、若し私かにこれを公にせば、萬一禁令を犯せしと罪を蒙るべき

も知られず。此一事而已（た）恐怖せし所なり。然れども横文字を其まゝに出（た）せるにはあらず、且（つ）讀（み）て見れば其姿は知（る）ることなり、我醫道發明の爲なれば敢て苦しからずと自ら決定し、何れにも翻譯といふ事を公（け）にする初を唱ふべしと、竊かに覺悟を極めて決斷せし事なり。但、是は其事の最初なれば、何ぞ此一部恐れ多くも冥加のため 公儀へ獻じ奉りたき志願なりしが、幸ひ同社桂川甫周君の御父甫三君は、前にいへる如くの舊友なりければ、此法眼に謀りしに、其取扱推舉により御奥より内獻し奉りぬ。斯く障もなく事濟（み）しは難有御事なりき。又翁が徒弟吉村辰碩は京都に住居せり。此人の推舉を以て、時の關白九條家並（び）に近衛准后、同前公及び廣橋家へも一部づゝ奉りぬ。これによりて三家より目出度（今）古歌を自ら執筆して賜はり、又東林（地）家より

よ七言篇の詩を賜して賜はりぬ尤（も）時の大小御老中方へも同じく一部づゝ進呈したり。何方とても何の障れる事もなく相濟みぬ。これらによりて大（い）に此舉に於（け）る安堵をなしたりき。これ蘭翻譯書公けになりぬるはじめなり。

一翁が初一念には、此學今時の如く盛〔ん〕になり、斯く開くべしとは曾て思ひよらざりしなり。是れ我不才より先見の識乏しきゆへなるべし。今に於てこれを願ふに、漢學は章を飾れる文ゆへ、其開け遅く、蘭學は實事を辭書に其まゝ記せし者ゆへ、取り受けはやく、開け早かりし歟。又、實は漢學にて人の智見開けし後に出〔で〕たる事ゆへ、かく速かなりしか、知るべからず。然れども、斯業の自然に開くべきの氣運にや、此ころより、前に記せる東奥の建部氏、翁には二十歳ばかり長〔け〕たる翁なるが、不思議に書牘の往復ありしが、我答書を得て實に狂喜管ならずと申越せし趣なれども、身の老朽を如何せんとして、其息亮策を我門に入れ、續いて、其門人＊大槻玄澤といふ男をさし登せて我門に入れたり。此男の天性を見るに、凡そ物を學ぶ事、實地を踏〔ま〕さればなすことなく、心に徹底せざる事は筆舌に上せず。一體豪氣は薄けれども、すべて浮〔き〕たる事を好〔ま〕ず。和蘭の究理學には生れ得たる才ある人なり。翁其人と才とを愛し、務めて誘導し、後々は直に良澤翁に託して此

業を學せしに、果して勉強怠らず、良澤も亦其人を知りて骨法を傳へし故、程なく彼書を解する事の大概を曉れり。其際、同僚淳庵、桂川法眼、又福智山侯杯と往來して此業を講究せり。又大〔い〕に志を興し、此上は西遊して長崎に至り直に彼通詞家に從ひ學び試〔み〕たきよしをはかりしゆへ、我も良澤も喜び許し、汝壯年行矣、勉メヨヤ、其事を濟さば宿業益々進むべしと慫慂せしにより、愈々憤起して志を負笈に決したり。然れども素より貧生の事なれば力の及〔ば〕ざる事どもなり。翁、其志に感じ、専ら其力を助けんと思へども、翁も其ころは生計かたく、思ふ程ならねば、力の及べるだけはこれを助け、且つ御同學たりし福知山侯も淺からぬ恩遇ありて、やがて彼地にいたり、本木榮之進といへる通詞家に寄宿し、教を受け、又彼に問ひ、此に謀り、油斷なく修行して歸府したり。爾後江戸永住の人となる事を得たり。扱、嘗て編集し置ける「蘭學階梯」といふ書ありしを、歸府の後、藏板して同志に示せり。此書出〔で〕し後、世の志あるもの、これを見て新〔た〕に憤悱し、志を

興せしも亦少からず。此人を通じ、此等の書の出づる事となりしも、翁が本志を天の助け給ふの一ツにやと思ひし事なり。

一此餘我門に出入せしもの、内、斯業を學び掛かりしもの多かりけれども、或は久しく都下に足をとどむることかたく、或は官途に羈られ、或は生計に逐はれ、或は病身、或は天死杯と、皆はかくしく事を遂げしもなかりき。然れども、翁がこれを發起せしにより、其支派分流を生じ出だせしは少からず。扱、安永七八年の頃、長崎より荒井庄十郎といへる男、平賀源内が許に來れり。これは西善三郎が舊の養子にして政九郎といひて通詞の業を爲せし人なり。社中蘭學を興すの最初なれば、翁が宅へ招き淳庵などと共に「サーメンスプラカ」を習ひし事もありし。源内死せし後、桂川家に寄食し、其業を助け、又福智山侯へも出入して侯の地理學の業にも加功したり。〔後等ら地理學を好み給ひ、其四國説等の蘭編あり。〕庄十郎、後は他家に在りて森平右衛門と改名したり。此人江戸へ下りて聊〔か〕社中を誘發せざりしにもあらざらんか。今は千古

の人となれり。

一津山侯の藩醫に宇田川玄隨すゑといへる男あり。これは元來漢學に厚く、博覽強記の人なり。此業に志を興し、玄澤によりて彼國書を習ひ、其紹介にて翁と淳庵へも往來し、桂川君、良澤へも漸く交を通じたり。

後に長崎前さきの通詞家白川侯の家臣となりし白井恒右衛門といふ人抔へも出入し、彼の言語の數々をも習ひしが、元來秀才にて鐵根の人ゆへ其業大いに進み、一書を譯し、「内科撰要」と題せる十八卷を著せり。是れ簡約の書といへども、本邦内科書新譯の始なり。惜しひかな四十餘にして泉路に趣まげり。此書説後にいたり漸し全部の開板となれり。

一京師きやうしに小石元俊もとゆといへる醫師あり。獨嘯菴の門人にて、醫事に志至して厚き男なり。翁固より相識れる人にあらず。彼れ始はめて「解體新書」を讀みて千古の説に差ひし所を疑ひ、親ら數々觀臟して斯書の着實なるに感じ、爾來深くこれを喜び、翁へ書信を通じて、猶其解しがたき所を尋問せり。天明五年の秋、翁、侯家に陪し

て其國に罷りし歸路、上京せし時、滯留の間、日夜來(り)て問難したり。其後は東遊し、玄澤が僑居を主とし、在留一年に近く、毎々社中と此業を討論せり。蘭學とては爲(さ)ざれども、歸京の後其塾に於て出入の諸生徒に「解體新書」を毎に講じて其實法を人に示せしと。これ關西の人を誘發せしの一ツなり。

蘭 一大阪に橋本宗吉といふ男あり。傘屋の紋かく事を業として老親を養ひ、世を營めりと。不學なれど、生來奇才あるものゆへ、土地の豪商ども見立て、力を加へ、江戸へ下して玄澤が門に入れたり。僅(か)逗留の間、出精し、其大體を學び、歸阪の後も自ら勉めて其業大(い)に進み、後は醫師となりて益々此業を唱へ、從遊の人も多く、漸く譯書をも爲し、五畿、七道、山陽、南海、諸道の人を誘導し、今に於けるいよいよ盛(ん)なりと聞けり。江戸へ來りしは寛政の初年の事なり。歸阪の最初、右の元俊も、彼が志を助けて其業を勵ましめしとなり。

一土浦侯の藩士に山村才助といふ一奇士あり。其叔父市川小左衛門を介として翁に蘭

學の事を問ふ。翁、其ころは年老(い)て、此業を以て悉く門人玄澤に託したれば、玄澤彼國文二十五字よりして教(へ)立(て)たり。天性其才備(は)り、殊に地學をこのみ、専ら其筋を專精せしが、白石先生の「采覽異言」を増譯重訂して十三卷の書を譯撰す。栗山先生の推舉によりて官へも内獻せり。其餘、翻譯の内旨も奉じたりしが、其業も全からずして卽世せり。惜むべしと云ふべし。萬國輿地の諸説は未だ漢人の知らざる所のもの多し。是れ蘭學のここに至れるの功なり。

一石井恒右衛門は長崎舊(もと)の譯官馬田清吉といふものなりしが、其家業を他人へ遜りて江戸へ來り、天明の中頃、白川侯の家臣となれり。侯その初めを知り「ドトニユース」本草を和解せしめ十數卷の譯説成れり。其業を卒へずして是亦異客となれり。稻村某といふ男、取(り)立(て)し「ハルマ」釋辭の書は全く此人の力に頼れり。此譯書は近來初學稽古の人々考閱の益ありといふ。此人もと舊職業を以(つ)て仕官すべしとて東下せしにはあらねども、斯(く)の如く隆盛の中へ來りし事ゆへ、専ら此

道の助けとなりたり。

一桂川家の事は前にもいへることくなり。甫周君は拔群の俊才ゆへ、凡そ和蘭の事にも略通し、其名聲四方へ走せ、尤^も常に其業事の起^りは公上にも知^るし召^されし事なれば時々西洋筋の事は和解御用も命ぜられし趣なり。其草稿其家には有^るべし。「和蘭藥撰」「海上備要方」抔云ふ譯説の著書ありと聞^けども、未だ成熟の書を見ず。年いまだ六十に滿^たずして千古の人となり給へり。

蘭 學 事 始

一因州侯の醫師稻村^{*}三伯といふ男あり。其國に在りて「蘭學楷梯」を見て憤發して江戸へ下り、玄澤が門を叩き、此業を學び、後に彼「ハルマ」といふ人著せる言辭の書を石井恒右衛門に依りて譯を受け、十三卷といふ和語解譯の書を編せり。其始め石井へ介をなし、原書も借^かし與へたりと。其初稿は宇田川玄隨、岡田甫説といふもの加功して、時々石井が許に往來して成就せりと。訂正の時に至りては、他に力を添へしものありとも聞けり。後、故ありて侯邸を退き、江州海上郡の邊に浪遊し、

遂に名を隨鷗と改め、京師に在りて専ら此業を唱へし由。今はこれも古人となれりと聞けり。併し釋辭の書を企て成せしは初學者の爲に一功といふべし。

一今の宇田川玄眞、初めは安岡氏にて、伊勢の人なり。江戸へ出で、岡田氏を冒し、上にいふ宇田川玄隨の漢學の弟子なりし由。玄隨、其才の周密なるを知りて、蘭學に引導せんとの意ありて、毎々玄澤へも噂せしことありしとなり。玄隨、一とせ、侯駕に陪して其國に至りし頃にや、養家を辭し、木姓安岡に復せし時、玄眞初(め)て師命を含「ん」で玄澤が許に來り、此學を習(は)「ん」事を請ふ。蘭學の書方までは玄隨より習ひ受けしと見へたれば、爲に「蘭言譯語」の一小冊を授けて寫さしめ、又彼の局方の書を讀(ま)しむ。日々往來し、且つ寄食の事を乞ひけれども、其ころ家に支れる事ありて、暫く同社嶺春泰が許に託す。此頃春泰、疾んで日々に篤し、終に物故せり。故に此後、玄澤甫周君へ謀りて同所へ託して曰く、此男蘭學熱心にして其依る所なきを憂ふ。爲にこれを取扱ひ給はらば、往々君の業を助くべきものな

るをと説く。君直に諾して、これより同家に入塾することになりぬ。其際も玄澤がもとに往來して、譯法を問ふ事しば／＼なり。本此男蘭説もとの實際に心酔していふ、吾他に望む所なし、隨意に此業の修行出来るの師塾ならば何方へも寄宿なしたきといふ宿願なり。それゆへ桂川家へ託せしことなり。然るに其ころ同家は官務と治業と繁多にして、彼が素志を達すること能はざるを玄澤に訴ふること繁まなり。一日、玄澤、翁に此事を語る。翁、其頃は次第に専門の療術寸暇なく、素業を勤むべき暇とてはなき身となりたり。然れども翁は素より此道に志深かりければ、猶益々其道を開きたきの志止みがたく、「解體新書」成就の後も、彼「ヘイステル」外科書の譯文に手をかけ、「金瘡」「瘡瘍」の諸篇は草を起して數卷の稿は出来たりしが、其頃度々の病に罹りしに、傍人も諫め、これは此業勤勉の祟りをなす所なれば、少間廢すべしといひ、尤も玄澤等もひたすら心志を放散し、偏へに老を養ふべし、不肖といへども其業吾これに代るべしともいひ、且つは次第に老い行く年なれ

ば、中々大業遂（ぐ）べき氣根もなく、其後は今に中絶したりけれども、其本志の已みがたく、數年の間見あたりし蘭書の分は、大部の物といへども、力に及べる程は費へを厭（は）ず購ひ求め、相應には藏書も集（ま）りたり。此學を事とせんとするもの誰にあれ、其志はありても、書籍に乏しき時は事成らずと思ひ自ら讀（む）には暇あらずとも、往々子弟等はもとより、志ある人に借（か）し與へて、此道開くるための裨益たるべしと思ひ、數十卷を藏したり。扱、同じくは年若く此道に志篤き人を見出（だ）し、別に一女に妻（は）し、養子となし、此業を遂（げ）させ、我醫道の未だ開（け）ずして未だ足らざる所を開きて之を補綴し、諸民の疾苦を廣濟なしたきものと朝暮心にかけてし折なれば、幸（ひ）に玄眞あることを喜び、即ちこれを招き、其志を問（ひ）しに、其云ふ處、玄澤が申せしに違はず。よりに翁が家に迎へ、父子の契を結びたり。玄眞も其意を得て深く喜び、我家の藏書を自在に取扱ひ、日夜怠らず學び、匪勉一かたならず、やゝもすれば夜を徹する事もあり、其精力の斯くなりしゆ

へ、進める事も又速〔か〕にして、其功昔日に倍せり。翁が喜びも亦知るべし。しかありけれども、其頃は年弱き時なれば、彼には専ら出精すれども亦氣の移りやすき客氣盛〔ん〕の最中なれば、身持至〔つ〕て放蕩となり、しば／＼異見をも加へたれども、愈々募りて已〔ま〕ざるにより、惜むべきの才子とは知りたれども、捨〔て〕置〔け〕ば如何なる事をや仕出〔か〕し、侯家の御名を汚すべき事もあるべしと、老が身の其心一日も易〔か〕らず、已むことを得ず離縁して長く交を絶〔ち〕たり。

事 一これによりて同社も交を通ぜず、彼も頼み少き身となりて甚だ窮厄してありしに、去〔り〕ながら其好む所の業は廢せざりしを、彼稻村なる者抔、ひそかに見次せしよしなり。其際稻村等、我男伯玄に内々謀りて、藏書中内科一二部の書を備して譯せしめなんどして其窮を凌がせしといふこと、後に聞〔き〕たり。遂には自新して志を改めたりと聞〔き〕たり。亦其頃、稻村が企〔て〕し「ハルマ」釋辭の書は、彼が加功して其業を助成せり。

一二三年過〔ぎ〕て後、宇田川玄隨、病によりて物故せり。其嗣子なきを以て弘く養子を求めたり。こゝに於て稻村氏仲立ちして宇田川の家を繼〔が〕せたり。前にいへる如く、玄隨へはしかじかの縁もあり、其なかりし後といへども、今亡父となりし人の志を繼ぎ、其身も志す所の本意を達せりといふべし。爾後益々專精して數多の譯説をも爲し、一醫範提綱*といふものを開板し、既に一家の事成りぬ。其行ひ改〔ま〕り其志立ちし上にて宇田川姓も繼〔ぎ〕し事なれば、再び翁へも交通をゆるし給〔は〕れと、伯玄、玄澤等が申〔す〕にまかせ、然る上は長く惡み遠〔ざ〕くべきにはあらずとて出入を許し、故の如く相親み、玄眞翁に仕〔ふ〕ること師父の如くなれば、翁も亦彼を見ること子の如くするの昔に復せり。

一玄澤は先に其名夙く成りて、近頃官府よりして新〔た〕に御藏和蘭の書翻譯の 臺命を蒙りしに至りぬ。昔し翁が輩の假初に企〔て〕し學業なりしに、今翁が世にありて顯らかにかゝる嚴命を蒙り奉りしは、冥加にもありがたく、翁が宿世の願満足せり

といふべし。何卒生民廣濟の爲にと思ひ立ちて取付きがたき此事に刻苦せし創業の功、終に空しからず、續いて玄眞も亦同様の命を蒙り、相俱に此に従事せる事となれり。仰ひで感戴するに堪へざる所なり。尤も、これ他にもあらず、翁が誘導せし我門の徒弟にして、此盛舉にあづかれる老が身の本懐亦何をかこれに加へん。翁が高齡を錫〔は〕りし天祿もありがたく、當時草葉の蔭と^{おたな}緯名せられし我身、今もなほ聖代にながらへて其全備を見せしめ給ふこと、限りなきの恩光、旻天の冥感にやあらん。

始 一此餘、玄澤、玄隨、玄眞が門より出〔で〕し青藍の器もあるよしなれども、翁が子の孫彦にして、委しく知る所にあらず。三都の間、諸侯の國々に分處するも多かるべし。

一昔し長崎にて西善三郎は「^{*}マーリン」の釋辭書を全部翻譯せんと企〔て〕しと聞〔き〕しが、手初迄にて、事成らずと聞けり。明和安永の頃にや、本木榮之進といふ人、

一二の天文曆説の譯書有りとなり。其餘は聞く所なし。此人の弟子に志築忠次郎といへる一譯士ありき。性多病にして早く其職を辭し、他へ遷り、本姓中野に復して退隱し、病を以つて世人の交通を謝し、獨り學んで専ら蘭書に耽り、群籍に目をさらし、其中彼文科の書を講明したりとなり。文化の初年、吉雄六次郎、馬場千之助などいふ者、其門に入りて、彼屬文並びに文章法格等の要を傳へしとなり。此千之助は今佐十郎と改名し、先年臨時の御用にて江戸に召寄せられしが數年在留し、當時御家人に召出され、永住の人となり、専ら蘭書和解の御用を勤め、此學を好めるもの、皆其讀法を傳ふる事となれり。我子弟孫子、其教を受くることなれば、各々其眞法を得て、正譯も成就すべし。扱、忠次郎は本邦和蘭通詞といへる名ありてより前後の一人なるべしとなり。若し此人退隱せずして職にあらば却てかくまでには至らざるべきか。是れ、或は、江戸にて我社の師友もなくして、推して彼邦書を讀み出せる事の始りしに、他人も憤發せる

の爲す所歟とも思はる。是亦昇平日久しく、是等の事も世に開くべきの氣運といふべし。

一一滴の油これを廣き池水の内に點すれば散じて滿池に及ぶとや。さあるが如し。其初、前野良澤、中川淳庵、翁と三人申し合せ、假初に思ひ付きし事、五十年に近き年月を経て、此學海内に及び、其所彼所と四方に流布し、年毎に譯説の書も出づる様に聞けり。これは一犬實を吠ゆれば萬犬虚を吠ゆるの類にて、其中にはよきもあしきもあるべけれども、それは姑らく申すに及ばず。かくも長命すれば、今の如くに開くる事を聞くなりと、一たびは喜び、一たびは驚きぬ。今此業を主張する人、是までの事を種々の聞き傳へ語り傳へを誤り唱ふるも多しと見ゆれば、跡先ながら覺え居たりし昔語をかくは書き捨てぬ。

一かへすくも翁は殊に喜ぶ、此道開けなば千百年の後々の醫家眞術を得て、生民救濟の洪益あるべしと、手足舞踏雀躍に堪へざる所なり。翁、幸に天壽を長くして

此學の開けかゝりし初より、自ら知りて今の斯く隆盛に至りしを見るは、これ我身に備〔は〕りし幸なりとのみいふべからず。伏して考〔ふ〕るに、其實は恭く太平の餘化より出〔で〕し所なり。世に篤好厚志の人ありとも、なんぞ戰亂干戈の間にしてこれを創建し、此盛舉に及ぶの暇あらんや。恐多くも、今茲文化十二年乙亥は、ふたらの山の 大御神、二百とせの御神忌にあたらせ給ふ。此 大御神の天下太平に一統し給ひて御恩澤敷ならぬ翁が輩まで加〔は〕り被〔ふ〕り奉り、くまなくすみくままで神徳の日の光照りそへ給ひし御徳なりと、おそれみかしくみ仰〔ぐ〕までも猶あまりある御事なり。其卯月これを手録して玄澤大槻氏へ贈りぬ。翁次第に老〔い〕疲れぬれば、此後かゝる長〔き〕事記すべしとも覺〔え〕ず。また世に在るの絶筆なりと知りて書〔き〕つゞけしなり。跡先きなる事はよきに訂正し、繕寫しなば、我孫子等にも見せよかし。八十三齡、九幸翁、漫書す。

蘭學事始終

(頁)

28 天正慶長の頃

——初めて二艘の葡萄牙商船が、一艘は薩摩鹿兒島へ、一艘は豊後臼杵へ漂着したのは天文十年(西暦一五四一)で、それがきつかけになつて所謂黒船賣買が行はれることゝなつたのであるが、天正年間(一五七三—九二)といへば織田、豊臣の時代で、政略上南蠻船の交易を迎へ、十四年までは切支丹の布教をも許してゐた。慶長年間(一五九六—一六一五)は徳川の初期で、前代の餘勢としてまだ黒船賣買が行はれてゐた。

23 國初以來甚だ嚴禁

——徳川の治世となり、改めて切支丹嚴禁の令が布かれたのは元和二年(一六一六)であつた。

28 阿蘭陀船は御免有

——阿蘭陀(荷蘭、和蘭)を除く外すべて通商を禁じられたのは元和七年(一六二一)であつた。阿蘭陀商館が肥前平戸に初めて建てられたのは慶長十四年(一六〇九)で、本文に「夫より三十三ヶ年目に」とあるのは此の年から數へての計算である。何となれば、長崎出島に平戸の阿蘭陀商館を移したのは寛永十八年(一六四一)であつたから。

29 西吉兵衛

——初め支庸、後、支甫と稱した。承應二年(一六五三)父吉兵衛隠退、後を

繼いで通詞となり、明暦二年（一六五六）大通詞となり、寛文九年（一六六九）家業をその子助次郎に譲り、玄甫と改名して醫業を開いた。俗に西流の祖と呼ばれてゐた。

29 我祖甫仙翁——杉田甫仙、若狭小濱の藩醫。漢方。玄白の父。大概磐水の「杉田玄白先生略傳」参照。15頁。

30 ドウ（道有）Danu（露）。——栗崎正羽、もと長崎の人、蘭方外科。享保十一年（一七二六）六十四歳を以つて江戸で歿した。初め吉田昌全（自庵）、村山大徳（自伯）と共に幕府の醫員に擧げられたのは元祿四年（一六九一）であつた。

30 檜林鎮山——春育と稱し、榮休と名のつた。長崎蘭方醫家。寶永中將軍綱吉の侍醫として召されたが辭して應じなかつた。正徳元年（一七一）六十四歳で歿した。子端山（榮久）、孫鎮成（榮哲）、等、皆名聲を得た。

30 桂川甫筑——もと大和の人、名は邦教、興菴と號した。通稱は小助。本姓は森島氏であつたが、師嵐山甫安（平戸の人）の流を汲むを以つて桂川と改めた。將軍家宣のまだ甲府侯たりし時から蘭方外科を以つて仕へた。享保九年幕府例參の阿蘭陀中必丹カビタンと對談を命ぜられ、延享四年（一七四七）八十九歳を以つて歿した。子も孫も甫筑を名のり、代幕府の外科醫を勤めた。四代目甫周、名は國瑞、月池と號し、才氣あり、杉田玄白等か助けて「解體新書」の翻譯にたづさはつた。「和蘭藥選」外科大成等の専門的著述のほか、「露西亞志」「露西亞略記」等の述作をして、文化六年（一八〇九）五十九歳を以

つて歿した。「蘭學事始」に今の桂川君とあるは、甫周歿後數年のことであるから、五代目の甫筑でなければならぬ。

30 文廟——徳川六代將軍家宣、甲府宰相綱重の長子、寶永六年（一七〇九）から正徳二年（一七一一）まで執政、新井白石を登用した。謚號、文昭院。

30 嵐山甫安——肥前平戸松浦氏の藩員、寛文元年（一六六一）長崎に行き、ハルマンズ・ヤラツ及びダンネル・ホランに就き阿蘭陀語並びに阿蘭陀流外科を學び、後「蕃國治方類聚」二卷の述作をした。桂川家の蘭家である。

31 吉雄——長崎に於ける最も古き通詞の家の一つ。家業として蘭方もやつてゐた。吉雄幸左衛門のことは下に出てゐる。本文40頁、註95頁參照。

32 セーヒー——Zanuw (herf; nare).

32 しかくの事——切支丹宗門禁止の理由となること。

33 有徳廟——有徳院は八代將軍吉宗の謚號である。吉宗の治世は享保元年（一七一六）から延享二年（一七四四）までであつた。本文に三人の長崎通詞家が阿蘭陀文書を讀むことを許されたのは延享二年だつた。（「新撰洋學年表」。）

33 西善三郎——阿蘭陀大通詞、明和五年（一七六八）五十二歳を以つて歿した。蘭語に堪能で、「マリーリン」の辭典を基礎として蘭日對譯辭書の編纂を企てたが成功しなかつた。

33 吉雄幸左衛門——後幸作と稱した。號、耕牛。吉雄流と呼ばれる蘭方外科を起して有

名になつた。専門的述作の外に、「魯使北京紀行」の翻譯あり、寛政十二年（一八〇〇）七十七歳で歿した。

33 今一人何某——名は忘れたりと玄白先生が注してある通詞は本木仁太夫のことだと大槻如電翁は云つて居る。（『新撰洋學年表』。本姓西氏、名は良永、蘭阜と號し、本木家第三世であつたが、話すことには巧みでなかつたらしい。

33 「コンストウォールド」——Kunst-woord (Kunst-woordenboek) 熟語辭典。

34 野呂元丈——名は實夫、連山と號した。伊勢の人で、京都に出て稻生若水の門に入り、本草を研究し、元文中幕命に依り、青木昆陽と共に例參の甲必丹に就いて阿蘭陀文辭を學習し、「阿蘭陀本草和解」を編述した。寶曆十一年（一六七一）六十九歳を以つて歿した。

34 青木文藏——蘭學研究の先驅者。名は敦書、字は厚甫、昆陽と號した。江戸に生れ、幼少より學を好み、伊藤東涯に就きて儒者となり、町奉行大岡忠相の推舉に依り、將軍吉宗の保護を受け、蘭學研究を命ぜられた。初めは野呂元丈と共に江戸例參の甲必丹に就いて學んだが、後官暇を請うて長崎に留學した。長崎滞留中、常語四百餘言を習ひ得て、文字の體制、言語の呼法、語路の意味等をほぼ了解したと「蘭學楷梯」に云つてある。明和六年（一七六九）七十二歳を以つて歿した。著作中洋學に關するものは「和蘭文字略考」「和蘭貨幣考」「和蘭語譯」「和蘭文譯」及び「昆陽漫錄」等である。

- 34 ソン——Zon.
- 34 マーン——man.
- 34 ステルレ——ster (*pl. sterren*).
- 24 ヘーメル——hemel.
- 34 アールド——ardl.
- 34 メンス——mensch.
- 34 ダラーカ——drack.
- 34 テキゲル——tigger.
- 34 プロイムボーム——prijmeboom.
- 34 バムブース——bamboes.
- 35 前野良澤——蘭學研究第一の先輩。名は^{よさ}、後蘭化と號した。本姓は谷口氏、豊前中津奥平氏の藩醫。青木昆陽に就いて蘭學を修めた期間は恐らく長くはなかつた。後、長崎に遊學し、吉雄、楡林等の通詞に就いて學習し、更に獨學勉勵して遂に蘭文の構造を會得したと「蘭學楷梯」は記してある。享和三年（一八〇三）八十一歳を以つて歿した。
- 「和蘭譯文略」「和蘭譯筌」「助語參考」「蘭語隨筆」「古言考」「點例考」「思思未通」「管蠡祕言」「八種字考」「彗星考」「和蘭築城書」「輿地圖編」「仁言私說」等の著書がある。
- 36 「蘭譯筌」——前掲「和蘭譯筌」のこと。

- 36 「和蘭文字略考」——青木昆陽著。前出。
- 36 延享の頃にや——延享元年。
- 36 後藤梨春——名は光生、太沖と稱し、梧桐庵と號した。江戸に生れ、日本、支那、和蘭の本草學を研究し、明和八年（一七七一）七十歳を以つて歿した。その著「紅毛談」は彼地人文地誌的紹介であつたが、禁止の外字を挿入したといふ理由で絶版を命ぜられたのは、明和二年頃のことであつた。
- 37 中川淳庵——名は鱗、杉田玄白と同じく若狭小濱の藩醫で、物産學の研究者であつた。天明六年（一七八六）四十八歳を以つて歿した。彼が「解體新書」の翻譯にいかに関係したかは本文につまびらかである。
- 37 或る年の春——明和の初年なりしかと斷つてあるが、大槻如電翁はそれは明和四年（一七六七）のことだとしてゐる。（「新撰洋學年表」）。當時、和蘭甲必丹には西善三郎（大通詞）が附いてゐたことは本文にある。その時、前野良澤四十五歳、杉田玄白三十五歳。青木昆陽が七十歳で書物旅行に昇進された頃のことであつた。
- 38 デリンキ——drink.
- 38 アーンテレッケン——antrekken: meet (with), come upon (to be attractive).
- 40 ウェールガラス——weerglas.
- 40 テルモメートル——thermometer.

- 40 ドンドルガラス —— *donderglas*.
 40 ホクトメートル —— *hoogtemeter*.
 40 ドンクルカームル —— *donkerkamer*.
 40 トーフルランタールン —— *tooverlantarn*.
 40 ゾンガラス —— *zonglas*.
 40 ループル —— *roeper*.
 40 明和四五年の間なるべし —— 明和五年(一七六八)三月。
 40 甲必丹 —— *Kapitein (Cepkain, mustar)*. 長崎へ毎來入港する阿蘭陀商船の船長。彼は一種の領事の如き職權を與へられてゐた。毎春江戸まで出府して將軍に拜謁することになつてゐた。
- 40 ヤン・カランス —— *Jan Krans*.
 40 バブル —— *Babel*.
 41 ヘーステル —— *Heester*.
 41 シュルゼイン —— *Chirurgijn (Surgeon)*.
 43 平賀源内 —— 名、國倫。號、鳩溪、又、風來山人。生れ得て才氣に富み、奇智縦横、初め讃岐高松藩主松平侯の醫員として長崎に學び、寶曆三年、二十四歳にて江戸に出で、物産學を専攻し、後藩侯に請うて浪人し、生涯自由人として行動し、或ひは述作し、或

ひは發明し、海内無賢愚悉知其名と玄白先生に評せられたほど有名になつた。安永八年（一七七九）瘡にさける事あつて學僕を殺し、罪を問はれて牢死した。年五十一。

44 スランガステーン —— *Slangasteen*. (*snake-stone*).

45 エレキテル —— *electro*.

46 田村藍水 —— 通稱、元雄。名、登。江戸の人。家業、醫。物産學者としてすぐれ、後舉げられて幕府の醫官となつた。平賀源内が江戸に出た當座は此の人に師事してゐた。安永五年（一七七六）五十九歳を以つて歿した。

46 田村西湖 —— 通稱、元長。名、善之。田村藍水の子。父子ともに中川淳庵、宇田川槐園等と並んで博物學者として有名であつた。寛政五年（一七九三）歿。

46 「ターヘル・アナトミア」 —— *Tafel Anatomia*. 「解體新書」の原書、「打係縷亞那都米」タヘルアナトミ丹都止夫王學校大醫學藥醫窮理學、與般亞單爾兒武思著。エントタケルムス

48 三月三日の夜 —— 明和八年（一七七二）。

48 千住骨ヶ原 —— 當時の刑場の一。

48 腑分 —— 解剖。

48 小杉玄適 —— 杉田玄白と同藩の醫員で、京都の官醫山脇東洋に師事して、漢方を家業とした。藩主が所司代を勤めてゐた時、その便宜を以つて刑人の屍體を解剖したのは寶曆四年（一七五四）のことであつた。

- 48 山脇東洋 —— 名は尙徳、漢方の大家であつたが、漢方の内臓説に疑を懐いて初めて前項の解剖丸行ひ、寶曆九年「臓志」を著はし、同十二年（一七六二）五十八歳を以つて江戸に歿した。
- 49 齡十ばかりも長じ —— 當時、良澤四十九、玄白三十九であつた。淳庵は三十三。
- 50 ロング —— long (肺臓)。
- 50 ハルト —— hart (心臓)。
- 50 マーグ —— maag (胃臓)。
- 50 ミルト —— milt (脾臓)。
- 54 良澤が宅 —— 鐵砲洲奥平家の藩邸。今の京橋區新榮町七丁目三十七番地から四十一番あたりへかけての區域であつたといふ。
- 55 デ —— de (the).
- 55 ヘット —— het (they, it; he, she).
- 55 アルス、ウエルケ —— als (as), welk (which).
- 56 フルヘン、ヘンデ —— verheffend (lifted up, raised).
- 57 シンネン —— zinnen (pl.)
- 60 嶺春泰 —— 高崎藩の醫員、蘭書の紹介に努力してゐたが、寛政五年（一七九三）四十八

歳を以つて歿した。

60 鳥山松圓 —— 庄内藩醫。

61 五十に満たずして —— 天明六年歿、享年四十八歳。

61 桐山正哲 —— 弘前藩醫

66 建部清庵 —— 名は由正、陸中一ノ關藩の醫員。蘭方。大槻玄澤の師家。「解體新書」刊

行の時（安永三年）六十三歳であつた。

67 「和蘭醫事問答」 —— 寛政七年（一七九五）刊行。

68 年は四年に満ちて —— 「解體新書」の翻譯に着手したのは明和八年（辛卯）三月五日

で、その刊行は安永三年（甲午）八月であつた。

70 エーン・デール —— *een deel* (one part).

70 ゲール —— *geer* (gore) 凝血。

70 ガル —— *gal* (*gall*) 膽汁。

72 大槻玄澤 —— 名は茂實、號は磐水。陸中一ノ關藩の醫員（蘭方外科）大槻玄梁の子。二

十二歳の時、同藩の醫家建部清庵の子亮策（十六歳）と共に江戸に出で、杉田玄白の門

人となり、更に前野良澤に就いて蘭語を學び、天明五年長崎に遊學し、同八年「蘭學楷

梯」を發表し、家塾芝蘭堂を開き、文政十年（一八二七）七十一歳を以つて死歿するま

で三十九年間に約百名の後進を養成した。述作多し。

- 73 福知山侯 —— 朽木昌綱、號龍橋。内外の古錢を蒐集し、「新撰泉譜」「西洋錢譜」の著あり、また蘭學を修め、世界地誌を研究し、「泰西輿圖說」を著した。享和二年（一八〇二）五十三歳を以つて歿した。「蘭學楷梯」に、當時の洋學者として、蘭化先生門下十五子の名を列記し、福知山侯はその第四位に置かれてある。
- 73 本木榮之進 —— 本姓西氏、名は良永。本木仁太夫の養子となりて、また仁太夫を名のつた。號蘭臯。天文人文物産の知識博く、後大通詞となり、寛政六年（一七九四）歿。享年六十。
- 73 江戸永住の人となる —— 大槻玄澤は元來一ノ關の醫家であつたが、天明六年三十歳の時、本藩仙臺侯の醫員に擧げられ、江戸定住を許された。
- 73 「蘭學楷梯」 —— 天明三年（一七八三年）大槻玄澤（名茂質、號磐水）二十七歳の述作。同八年刊行。上下二卷。上卷章を別つ九、蘭人通商の初より蘭學興隆の次第を述べ、下卷十六章、蘭語文法の入門的説明である。朽木龍橋、天恩孔平の序文を添へ、桂川甫周、宇田川槐園の跋を附す。最初の洋學獨習書で、當時非常なセンセーションを起した。
- 74 荒井庄十郎 —— 長崎の人、後福知山藩主朽木龍橋に仕へた。
- 74 「サーメンズプラーク」 —— *Samenpraak (Conversation)*.
- 75 宇田川玄隨 —— 名晉、號槐園、又東海。津山藩醫。桂川甫周に就いて蘭學を修め、内科を専攻し、寛政四年（一七九二）「西說内科探要」を譯した。（ヨハンネス・テ・ゴルテ

ル原著、寛政九年歿、年四十三。

75 小石元俊 —— 名は道、號は大愚。京都の人。天明六年（一七八六）江戸に下り、杉田玄白の門に入り、後京阪に開業し、「解臈圖誌」などの著述あり。文化五年（一八〇八）、六十六歳を以つて歿した。

76 橋本宗吉 —— 大阪の人。中年より蘭學に志し、小石元俊、間長涯等の厚意に依り江戸に學び、大槻の門下となり、才能を現はし、述作も少くない。天保七年（一八三六）七十歳で歿した。

76 山村才助 —— 土浦藩士、大槻玄澤に就いて蘭學を修め、享和二年（一八〇二）「増譯采覽異言」を刊行し、文化四年（一八〇七）三十八歳で歿した。原本「采覽異言」については次の項を見よ。

77 「采覽異言」 —— 新井白石の編した世界地理書で、その素材は寶永五年（一七〇八）八月尾久島に漂着したローマ布教師ヨアン・パツテイスタ・シロテを、翌年長崎から江戸へ廻し、小石川切支丹屋敷に幽閉して、暮命に依つて白石が世界の大勢に就き訊問した、その時の記録である。すべて五卷。漢文を以つて綴り、序文は正徳三年（一七一三）の日附である。外に當時の副産物として「西洋紀聞」三卷（和文）がある。長く寫本を以つて行はれてゐたが、前者は明治十四年、後者はその翌年、いづれも大槻文彦氏の校訂に依つて出版された。

77 稻村某——稻村三伯（海上隨鷗）、後出。

77 ハルマ釋辭の書——フランソア・ハルト F. Hartma の蘭佛辭典から約八萬の蘭語を抜いてそれに和譯を加へたもので、本文にある通り、石井恒右衛門の助力で稻村三伯が編纂した。寛政八年（一七九六）の刊行で、「波留麻和解」（又「東西韻會」と題し十三卷であつた。之は後に長崎で編纂された「道譯法兒馬」〔Hendrik Doeth の主宰で別にハルマから新たに編された寫本八卷もの〕が俗に「長崎ハルマ」と呼ばれるに對して「江戸ハルマ」と呼ばれた。

78 稻村三伯——芝蘭堂門下の秀才の一人で、因州藩醫。後浪人して海上隨鷗と名乗り、京都に住んだ。「ハルマ和解」に依つて有名である。

79 宇田川玄眞——芝蘭堂門下の安岡玄眞、宇田川玄隨（槐園）の家を繼ぎ、榛齋と號し、また東海の別號あり。「和蘭局方」の著あり。天保五年（一八三四）六十六歳を以つて歿した。

83 「醫範提綱」——宇田川玄眞著、文化二年（一八〇五）刊行。

84 「マーリン」の釋辭書——前出。（註、西善三郎の項、91頁）。

85 志筑忠次郎——名、忠雄。號、柳圃。後本姓中野に復す。安永六年、十八歳の時辯舌の巧みならざるを自覺して通詞を辭し、本木仁太夫に就きて學習し、閉居研究三十年、遂に鬱然たる蘭學の大家となつた。文化三年（一八〇六）四十七歳で歿した。

- 85 吉雄六次郎——後、權之助。名、永保。號、如淵。阿蘭陀通詞、文化六年馬場佐十郎等五人と共に初めて正式に英語を學んだ。
- 85 馬場千之助——後、佐十郎。名、貞由。號、穀里。學才あり。文政五年（一八二二）三十六歳を以つて歿した。
- 87 文化十二年乙亥——四月、東照宮二百年神忌。十一代將軍家齊治世二十九年。西曆一八一五年。

附記——註解の蘭語に就きては拓殖大學教授岡本精一氏の示教を感謝す。（校註者）

巖波文庫
665

昭和五年七月五日印
昭和五年七月十日發行
昭和八年三月三十日第三刷發行



發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七・〇〇一八八番
九段 〇〇一八九・〇〇一八八番
振替東京三六二四〇番

校訂者

野上 豊一郎

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地
岩波 茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十七番地
白井 赫太郎

(複木製本)

蘭學學始*

定價 二十錢

精興社印刷

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂字に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽す誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍を翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず續著を駁釋して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の際に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、従來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て速次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては厳選最も力を盡し従來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望することである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのらるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

- 新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ***
- 新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ***
- 新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ***
- 新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ***
- 古事記 幸田成友校訂 *
- 新日本書紀 上卷 巖谷勝美編 *
- 新日本書紀 中卷 巖谷勝美編 ***
- 古語拾遺 加藤玄智校訂 *
- 水鏡 和田英松校訂 *
- 大鏡 和田英松校訂 *
- 和鏡 和田英松校訂 *
- 三條西榮花物語 卷上 三條西公正校訂 ***
- 三條西榮花物語 卷中 三條西公正校訂 ***
- 家本榮花物語 卷三 三條西公正校訂 ***
- 伊勢物語 尾代弘賢校訂 *

- 竹取物語 前附録 島津久基校訂 *
- 平家物語 上卷 山田孝雄校訂 ***
- 平家物語 下卷 山田孝雄校訂 ***
- 源氏物語 (一) 島津久基校訂 ***
- 源氏物語 (二) 島津久基校訂 ***
- 源氏物語 (三) 島津久基校訂 ***
- 源氏物語 (四) 島津久基校訂 ***
- 土佐日記 池田龜藏校訂 *
- 紫式部日記 池田龜藏校訂 *
- 更級日記 西下經一校訂 *
- 枕草子(春曙抄) 上 池田龜藏校訂 ***
- 枕草子(春曙抄) 卷中 池田龜藏校訂 ***
- 倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 *
- 古今和歌集 尾上八郎校訂 ***
- 新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ***
- 新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ***
- 新金槐和歌集 改訂 齋藤茂吉校訂 ***

- 藤原定家 歌附家集 佐佐木信綱校訂 ***
- 法華義疏 上卷 聖德太子御説 北山信勝校訂 ***
- 正法眼藏隨聞記 和辻哲朗校訂 *
- 日蓮上人文抄 篤崎正治校註 ***
- 歎異抄 金子大榮校訂 *
- 徒然草 西尾實校訂 *
- 方丈記 山田孝雄校訂 *
- 花傳書 世阿彌著 野上彌一那校訂 *
- 申樂談 義野上彌一那校訂 *
- 能作書・覺習條 條野上彌一那校訂 *
- 至花道 條野上彌一那校訂 *
- 入木道 三部 條野上彌一那校訂 *
- 奥の細道 その他 芭 伊藤松字校訂 *
- 芭蕉七部集 伊藤松字校訂 ***
- 芭蕉連句集 小宮登隆編 ***
- 芭蕉俳句集 須原退藏校註 ***
- 燕村七部集 伊藤松字校訂 ***
- 風俗文選 伊藤松字校訂 ***

鶉 衣 石田元季校訂 ★★

おらが春 我春集 一 萩原井泉 茶枝 校訂 ★

風柳多留 上卷 西原柳雨校訂 ★★

風柳多留 中卷 西原柳雨校訂 ★★

風柳多留 下卷 西原柳雨校訂 ★★

萬載狂歌集 野崎左文校訂 ★

德和歌後萬載集 野崎左文校訂 ★

松の落葉 藤田徳太郎校註 ★★

閑吟集 附言小歌集 藤田徳太郎校註 ★★

好色一代男 西田萬吉校訂 ★

好色一代女 西田萬吉校訂 ★

好色五人女 西田萬吉校訂 ★

日本永代藏 西田萬吉校訂 ★

世間胸算用 西田萬吉校訂 ★

西鶴織留 西田萬吉校訂 ★

武家義理物語 西田萬吉校訂 ★

武道傳來記 西田萬吉校訂 ★

椿説弓張月 上卷 西田萬吉校訂 ★★

椿説弓張月 中卷 西田萬吉校訂 ★★

椿説弓張月 下卷 西田萬吉校訂 ★★

性權合 近松門左衛門作 ★

我心天の網 和野馬琴作 ★

浮世風呂 和野馬琴作 ★★

浮世床 和野馬琴作 ★★

東海道膝栗毛 和野馬琴作 ★★

加賀 和野馬琴作 ★★

赤垣源藏・仲光 和野馬琴作 ★★

忍屋の徳 和野馬琴作 ★★

孝子善吉 和野馬琴作 ★★

鼠小僧 和野馬琴作 ★★

實録先代萩 和野馬琴作 ★★

笠野 和野馬琴作 ★★

辨天小僧歌 阿彌作 ★★

小説・戯曲・詩歌・隨筆・評論

こゝろ 夏目漱石著 ★★

道草 夏目漱石著 ★★

行旅 夏目漱石著 ★★

草廬 夏目漱石著 ★★

坊つちやん 夏目漱石著 ★★

五重塔 幸田露伴著 ★★

風流佛・一口劍 幸田露伴著 ★★

二人女 房尾崎紅葉著 ★★

觀音岩 前篇 川上眉山著 ★★

觀音岩 後篇 川上眉山著 ★★

にげくら 入道口一葉著 ★★

うたかたの記 他三篇 蘭外著 ★★

新曲誌 高野内道遠著 ★★

運命論者他二篇岡木田湖歩著★	源をぢ 他二篇岡木田湖歩著★	號 外 他六篇岡木田湖歩著★	櫻の實の熟する時 島崎藤村著★	千曲川のスケッチ 島崎藤村著★	飯倉だより 島崎藤村著★	春を待ちつゝ 島崎藤村著★	生ひ立ちの記 島崎藤村著★	蒲團・一兵卒 田山花袋著★	田舎教 師田山花袋著★	小僧の神様 他十篇志賀直哉著★	和解。或る男 志賀直哉著★	其姉の死 志賀直哉著★	陸奥直次郎 長興吾郎著★	青銅の基 督長興吾郎著★	偷 盜 芥川龍之介著★	侏儒の言葉 芥川龍之介著★	厭世家の誕生 日佐藤春夫著★	(他六篇)
入江のほとり 正宗白鳥著★	生まざりしならば 正宗白鳥著★	大石良 雄野上彌生子著★	海神 丸野上彌生子著★	出家とその弟子 倉田百三著★	布施太子の入山 倉田百三著★	幸福 武者小路實篤著★	その 妹 武者小路實篤著★	人間萬歳 武者小路實篤著★	友 情 武者小路實篤著★	煤 煙 森田草平著★	波 山本有三著★	病牀六尺 正岡子規著★	墨汁一滴 正岡子規著★	仰臥漫錄 正岡子規著★	子規歌集 正岡子規著★	左千夫歌集 齊藤茂吉選★		
左千夫歌論抄 齊藤茂吉編★	上田敏詩抄 茅野蕭々編★	晚翠詩抄 土井晚翠著★	藤村詩抄 島崎藤村自選★	有明詩抄 蒲原有明著★	泣菫詩抄 藤田泣菫著★	文道遙遺稿 他川端風樹★	歌舞音樂略史 小中村清麿著★	俗樂旋律考 上原六四郎著★	蘭學事始 杉田元白著★	茶の 本 岡倉覚三著★	網島梁川集 安倍能成編★	清澤文集 清澤翁之著★	福澤撰集 福澤諭吉著★	北村透谷集 島崎藤村編★	海舟座談 巖本善治編★			

外國文學(小説・戯曲・詩)

杜	詩 卷之一 漆山又四郎譯註	★
杜	詩 卷之二 漆山又四郎譯註	★
杜	詩 卷之三 漆山又四郎譯註	★
杜	詩 卷之四 漆山又四郎譯註	★
陶淵明	集 漆山又四郎譯註	★
唐詩選	上卷 漆山又四郎譯註	★
唐詩選	下卷 漆山又四郎譯註	★
唐詩選	附作者 漆山又四郎譯註	★
通俗古今奇觀	濟主人譯	★
小猿蓑	青木正兒校註	★
即興詩人	上卷 森 外譯	★
即興詩人	下卷 森 外譯	★
ブランドン	ドイブセン作	★★
幽 靈	曲 ストリントベルク作	★★
稻	妻 ストリントベルク作	★★
父	小宮 隆譯	★
令嬢	ユリ エストリントベルク作	★
オネーギン	茅野 蒼々譯	★
	米川正夫譯	★★

イワーシイワーノキツチ	トイワーシニキフオロ	ゴロゴロ	リ作	★
検 察 官	米川正夫譯	限久一郎譯		★★
現代のヒーロー	レールモントフ作	中村白鷺譯		★★
皇帝フォードル	アカトルストイ作	除村吉太郎譯		★
プウニンとパプリン	小沼 建譯			★
罪と罰 第一卷	ドストエーフスキイ作	中村白鷺譯		★★
罪と罰 第二卷	ドストエーフスキイ作	中村白鷺譯		★★
罪と罰 第三卷	ドストエーフスキイ作	中村白鷺譯		★★
カラマーゾフの 第一卷	ドストエーフスキイ作	中村白鷺譯		★★
カラマーゾフの 第二卷	ドストエーフスキイ作	米川正夫譯		★★
カラマーゾフの 第三卷	ドストエーフスキイ作	米川正夫譯		★★
カラマーゾフの 第四卷	ドストエーフスキイ作	米川正夫譯		★★
貧しき人々	ドストエーフスキイ作	原久一郎譯		★★
永遠の良人	ドストエーフスキイ作	原久一郎譯		★★
戦争と平和 第一卷	トルストイ作	米川正夫譯		★★
戦争と平和 第二卷	トルストイ作	米川正夫譯		★★
戦争と平和 第三卷	トルストイ作	米川正夫譯		★★
戦争と平和 第四卷	トルストイ作	米川正夫譯		★★
戦争と平和 第五卷	トルストイ作	米川正夫譯		★★

戦争と平和 第三卷	トルストイ作	米川正夫譯	★★
戦争と平和 第三卷	トルストイ作	米川正夫譯	★★
戦争と平和 第四卷	トルストイ作	米川正夫譯	★★
戦争と平和 第四卷	トルストイ作	米川正夫譯	★★
戦争と平和 第五卷	トルストイ作	米川正夫譯	★★
イヴンイリツチの死	トルストイ作	米川正夫譯	★
結婚の幸福	トルストイ作	米川正夫譯	★★
光あるうちに光	トルストイ作		★
クロイツェルソナタ	トルストイ作	米川正夫譯	★★
復 活 上卷	トルストイ作	中村白鷺譯	★★
復 活 中卷	トルストイ作	中村白鷺譯	★★
復 活 下卷	トルストイ作	中村白鷺譯	★★
闇 の 力	トルストイ作	米川正夫譯	★
生 ける 屍	トルストイ作	米川正夫譯	★
幼 年 時 代	トルストイ作	米川正夫譯	★★
少 年 時 代	トルストイ作	米川正夫譯	★★
人は何で生きるか	他四篇	中村白鷺譯	★
トルストイ民話集	他八篇	中村白鷺譯	★

愛と死との戯れ ロマン・ロマン作 ★
 獅子座の流星群 片山敏彦作 ★
 法王廳の抜穴 アンデル・レ・シツド作 ★★
 クオレ 愛の上巻 前田 見壽著 ★★
 クオレ 愛の下巻 前田 見壽著 ★★
 恐るしき媒 ホセ・エチエガライ作 ★★
 作り上げた利害 ベトベンテ作 ★★
 子守唄 永田寛定譯 ★★
 希臘羅馬神話 バルフィンチ作 ★★
 フォースタス博士 マリー・ロウ作 ★★
 パーインズ詩集 中村爲治譯 ★★
 エヴァンジェリン ロシタフエロウ作 ★★
 クリスマス・カロール ディッケンズ作 ★★
 プラウ 森田草平譯 ★★
 ニング サウ ル 齋藤 勇譯 ★★
 ラム沙翁物語 野上彌生子譯 ★★
 プレイク抒情詩抄 書岳文章譯 ★★
 小公 子 若松藤子譯 ★★

聖女デヨウン 野上登一郎譯 ★★
 人と超人 市川又彦譯 ★★
 鰥夫の家 市川又彦譯 ★★
 思想の遙し得る限り 相良徳三譯 ★★
 緋文 宇佐藤 藩譯 ★★
 ヘーデイ短篇集 森村豊譯 ★★
 幻想を追ふ女 他六篇 ★★
 ユリシイズ 一) デイムス・デヨイス著 ★★
 ユリシイズ 二) チエニス・デヨイス著 ★★
 ユリシイズ 三) 森田・名原他四名譯 ★★
 ニリシイズ 三) 森田・名原他四名譯 ★★

哲學・自然科學・文學・宗教・教育

プラソクラテスの辯明 久保 通譯 ★★
 トンク リトリ トン 阿部次郎譯 ★★
 トンク プラソクラテス 阿部次郎譯 ★★
 トンク 純粋理性批判上巻 天野貞祐譯 ★★
 トンク 實踐理性批判 波多野精一譯 ★★
 トンク カンプロレゴリーメナ 桑本和吉譯 ★★
 トンク カンプロレゴリーメナ 桑本和吉譯 ★★

スピノ哲學體系 小尾範治譯 ★★

スピノ知性改善論 島中尚志譯 ★★
 哲學とは何か ツインデルバント著 ★★
 イマヌエル・カント 河東 瀧譯 ★★
 歴史と自然科學 聖田英雄譯 ★★
 徳の原理に就て 聖田英雄譯 ★★
 認識の對象 山内得立譯 ★★
 七大哲人 オイケン著 ★★
 科學の價值 ボアンカレ著 ★★
 科學と方法 ボアンカレ著 ★★
 科學者と詩人 ボアンカレ著 ★★
 將來の哲學 フナイエルバウ著 ★★
 根本命題 植村晋六譯 ★★
 科學的宇宙觀の變遷 守田寛彦譯 ★★
 アルプスの氷河第一 ジョン・チンブル著 ★★
 アルプスの氷河第二 ジョン・チンブル著 ★★
 自然認識の限界 デニポアレ著 ★★
 自然に於ける美 ソロウイヨフ著 ★★
 藝術の一般的意義 高村理智夫譯 ★★
 ケーベル博士隨筆集 久保 勉譯 ★★
 カントとゲエテ 谷川徹三譯 ★★

フアーブル昆蟲記 山田吉彦 譯

既刊 定價各★★

第二分冊・第九分冊・第十分冊
第十二分冊・第十三分冊・第十四分冊
第十七分冊・第十八分冊

チャールズ・ダーウキン 小泉 丹譯★★

種の起原 上巻 小泉 丹譯★★

人及び動物の表情について 中澤太郎譯★★

雜種植物の研究 小泉 丹譯★★

生命の不可思議上巻 後藤格次譯★★

生命の不可思議下巻 後藤格次譯★★

回想のゼザンヌ 有島生馬譯★★

この人を見よ ユーリチエ 譯★★

ミル 自傳 西本正美 譯★★

佛蘭西文學史 序 關根秀雄 譯★★

伊太利文藝復興期のブルックハルト著 上巻 村松恒一 譯★★

文化ノ上巻 村松恒一 譯★★

ペーター論集 田部重治 譯★★

ラフカディオ・東文西語評論 十一卷 義三郎 譯★★

文學史の方法 テエム 譯★★

人間の精神 立花祐進 譯★★

戀愛論 上巻 前川堅市 譯★★

戀愛論 下巻 前川堅市 譯★★

戀愛と結婚 上巻 エレン・ケイ 譯★★

戀愛と結婚 下巻 エレン・ケイ 譯★★

イ・エ ス 林 澧 譯★★

イメターシヨ・クリス 内村建三郎 譯★★

要アウグスチン懺悔錄 内村建三郎 譯★★

アウグステインのフオンバルナツク 山 谷 省 吾 譯★★

唯一者とその所有 上 下 草間平作 譯★★

唯一者とその所有 下 草間平作 譯★★

エミール(第一卷) 平林初之輔 譯★★

エミール(第二卷) 平林初之輔 譯★★

エミール(第三卷) 平林初之輔 譯★★

エミール(第四卷) 平林初之輔 譯★★

懺悔錄 上巻 石川巖 譯★★

懺悔錄 中巻 石川巖 譯★★

懺悔錄 下巻 石川巖 譯★★

人生論 トルストイ 譯★★

獨逸國民に告ぐ 中村白雲 譯★★

内村鑑三隨筆集 内村鑑三 著★★

文明論之概略 關澤謙吉 著★★

論畫 四種 坂崎垣 著★★

法律・社會・政治・經濟

アリストアテナイ 限 國 譯★★

法の精神 上巻 モンテスキュー 著★★

法の精神 下巻 宮澤俊義 譯★★

權利のための闘争 エーリクソン 著★★

民約論 平林初之輔 譯★★

國富論 上巻 氣賀勳重 譯★★

勞働者綱領 小泉信三 譯★★

貧困學 木下平治 譯★★

資本論初版鈔 マルクス著 長谷部文雄譯 ★★

マルクス夫人問題を論ず 久留間敷六郎 堀川憲次譯 ★★

エンゲル自然辯證法上巻 加藤正郎譯 ★★

ルンペン自然辯證法下巻 加藤正郎譯 ★★

エンゲル自然辯證法下巻 加古祐二譯 ★★

住宅問題 エンゲル著 加田哲二譯 ★★

家族の起源 エンゲル著 西雅雄譯 ★★

フオイエルバツハ論 佐野文夫譯 ★★

反デューリング論 エンゲル著 長谷部文雄譯 ★★

反デューリング論 エンゲル著 長谷部文雄譯 ★★

ルンペン空想より科學へ 漢野吳譯 ★★

マルクス・エンゲルス傳 リヤザノフ著 長谷部文雄譯 ★★

ローザルクセン ルイゼ・カウツキ編 松井圭子譯 ★★

ブルグクの手紙 リヤザノフ編 高橋譯 ★★

マルクス・ドイッチェ リヤザノフ編 高橋譯 ★★

エンゲルスイデオロギ 三木清譯 ★★

レニ帝國主義 長谷部文雄譯 ★★

レニ唯物論と經驗批 佐野文夫譯 ★★

レニ唯物論と經驗批 佐野文夫譯 ★★

レニ唯物論と經驗批 佐野文夫譯 ★★

レニ何を爲すべきか 平田良齋譯 ★★

經濟學及課税之原理 リカアドナ著 小泉信三譯 ★★

道徳の經濟的基礎 草間平作譯 ★★

ラッス藝術經濟論 西本正英譯 ★★

建築の七燈 ラスキン著 高松川譯 ★★

この後の者にも ラスキン著 西本正英譯 ★★

地代論 山口正吾譯 ★★

ペリ婦人論 上巻 草間平作譯 ★★

ペリ婦人論 下巻 草間平作譯 ★★

近代民主政治 三ブライイ著 武藤譯 ★★

近代民主政治 三ブライイ著 武藤譯 ★★

近代民主政治 三ブライイ著 武藤譯 ★★

近代民主政治 三ブライイ著 武藤譯 ★★

近代民主政治 三ブライイ著 武藤譯 ★★

近代民主政治 三ブライイ著 武藤譯 ★★

近代民主政治 三ブライイ著 武藤譯 ★★

近代民主政治 三ブライイ著 武藤譯 ★★

近代民主政治 三ブライイ著 武藤譯 ★★

經濟要録 佐藤信淵著 龍本崎一校訂 ★★

御註文に就て

□此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。

□内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。

□最低の廉價 出来る丈安く手に入れられる様に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。

□購求の自由 しかも讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。

□印刷の鮮明、校正の正確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。

□體裁は菊牛裁判、紙裝、平福百穂畫伯裝幀。

□活字は八ポイントを用ひました。
□約百頁を單位として星一つでそれを現はし、★一つ毎に二十銭の定價です。

最新刊書目

□★一つを1に算へて此の文庫の番號を
 進めてゆきます。
 □番號はただ發行順に従つて之を追ふも
 のであります。
 □★或は★★★は、それぞれ二百頁或は
 三百頁の本一冊なることを示し、百頁
 づつの分冊ではありません。
 □定價(及び送料)は左表の通りです。
 ★ 定價二十錢 送料二錢
 ★★ 四十錢 四錢
 ★★★ 六十錢 四錢
 ★★★★ 八十錢 六錢
 ★★★★★ 一圓 六錢
 □御註文は前金で御願ひ致します。小さ
 い本で極度の廉價なのですから必ず送
 料をお添へ下さい。切手代用は一割増
 に願ひます。

武	道	傳	來	記	西田萬吉校訂 和田鶴
論	畫	四	種	種	坂崎垣編 ★
侏	儒	の	言	葉	芥川龍之介著 ★
生	ひ	立	ち	の	記(附非生) 島崎藤村著 ★
譯	李	太	白	詩	選(上卷) 幸田露伴校閱 漆山又四郎註 ★
聖	女	ヂ	ヨ	ウ	ン(ジャンヌ) シヨ才作 野上豊一郎譯 ★
短	篇	集	幻	想	を
追	ふ	女	(他五篇)	森村豊譯 ★	ハライイ 短篇集
ガ	デ	イ	ム	ズ	ユ
リ	シ	ー	ズ	(三)	森田名原龍口譯 小野安藤村山 ★
風	車	小	屋	だ	よ
へ	ル	マ	ン	と	ド
ロ	テ	ア	ゲ	ー	テ
ト	イ	作	佐	藤	通
次	譯	作	★	★	★
ト	イ	作	米	川	正
夫	譯	作	★	★	★
ト	イ	作	米	川	正
夫	譯	作	★	★	★
ト	イ	作	少	年	時
代	代	代	少	年	時
代	代	代	★	★	★

最新刊書目

トルストイ 人は何で生きるか
民語集 (他四篇)
中村白葉 譯 *

トルストイ イワンの馬鹿
民語集 (他八篇)
中村白葉 譯 *

永遠の良人
ドストイエフスキイ 作
原久一郎 譯 *

三人姉妹
チエリホフ 作
米川正夫 譯 *

内村鑑三隨筆集
内村鑑三 著 *

人生論
トルストイ 著
中村白葉 譯 *

エミイル (第四篇)
トルストイ 著
平林初之輔 譯 *

イ エ ス
ブルツセ 著
林達夫 譯 *

アルプスの氷河
(主に科學的)
チンダリ 著
矢島祐利 譯 *

反デューリング論 (下巻)
エンゲルス 著
長谷部文雄 譯 *

近刊書目

翻譯 日本書紀 (下巻)
黒板勝美 編 *

西鶴諸國咄
本朝櫻陰比事
和田萬吉 校訂 *

翻譯 李太白詩選 (下巻)
幸田露伴 校訂
漆山又四郎 譯 *

ユリシイズ (四)
チヨイス 著
森田他五名 譯 *

人間機械論
ラメトリイ 著
杉捷夫 譯 *

フアル昆蟲記 (第二十册)
山田達吉 著
山田達吉 譯 *



4. 11.

三喜文一甲 = 土田



岩波